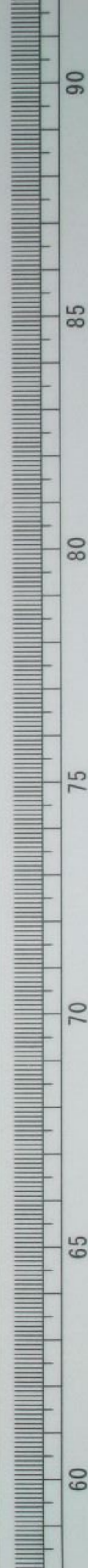


特別
ハ4
5343
I



行
八
5343
/

横山家藏

58-2025

日蓮聖人註畫讚序

沙門日澄 錄

釋日蓮法將者不怖刀杖之重障不憚謫戮
之巨難著忍辱之堅甲於慈悲膺揮妙法之
利劍於信力手摧破執權之軍陳切斷謗實
之魔賊猶恨重崇法王之鳳銜罕輕蔑佛使
之龍泉鬱雖然八教之堅陳稍敗方便之勁
軍三類之強敵漸挫怨嫉之銘鋒因茲降者
但信伏頭服者合隨從掌於是權實之法令

明順逆之賞罰信且見存亡機圖安危世預
勘將來現得符合寔旃死身弘法之烈將破
權門理之導師呵責謗法之銳士兼知未萌
之聖人緇田之秀穗法林之翹楚也邪智雖
騁百非而非所毀竒辯雖飛萬是而非所譽
絕倫高德叵得而稱焉予謹註前書與盡後
系略讚玄德号曰註畫讚三十二篇篇次序
年月而繫言分爲五卷千古難備芟煩披華
留贈後昆望垂添削云爾

目錄

- | | |
|----------|----------|
| 誕生第一 | 登山出家第二 |
| 遊學第三 | 建立宗旨第四 |
| 造安國論第五 | 諸宗夜討第六 |
| 伊東左遷第七 | 立像釋迦第八 |
| 文永彗星第九 | 慈母蘇活第十 |
| 東條被疵難第十一 | 蒙古牒狀第十二 |
| 十一通回狀第十三 | 祈雨勝負第十四 |
| 行敏狀第十五 | 龍口頭座難第十六 |

赴依智第十七

樓中遣狀第十八

佐渡流刑第十九

諸宗問答第二十

重連追來第二十一

印性房第二十二

尼問第二十三

前司狀第二十四

赦免狀第二十五

重謁頼綱第二十六

入身延山第二十七

蒙古來第二十八

龍象房第二十九

附蒙古來

示寂第三十

收取遺骨第三十一

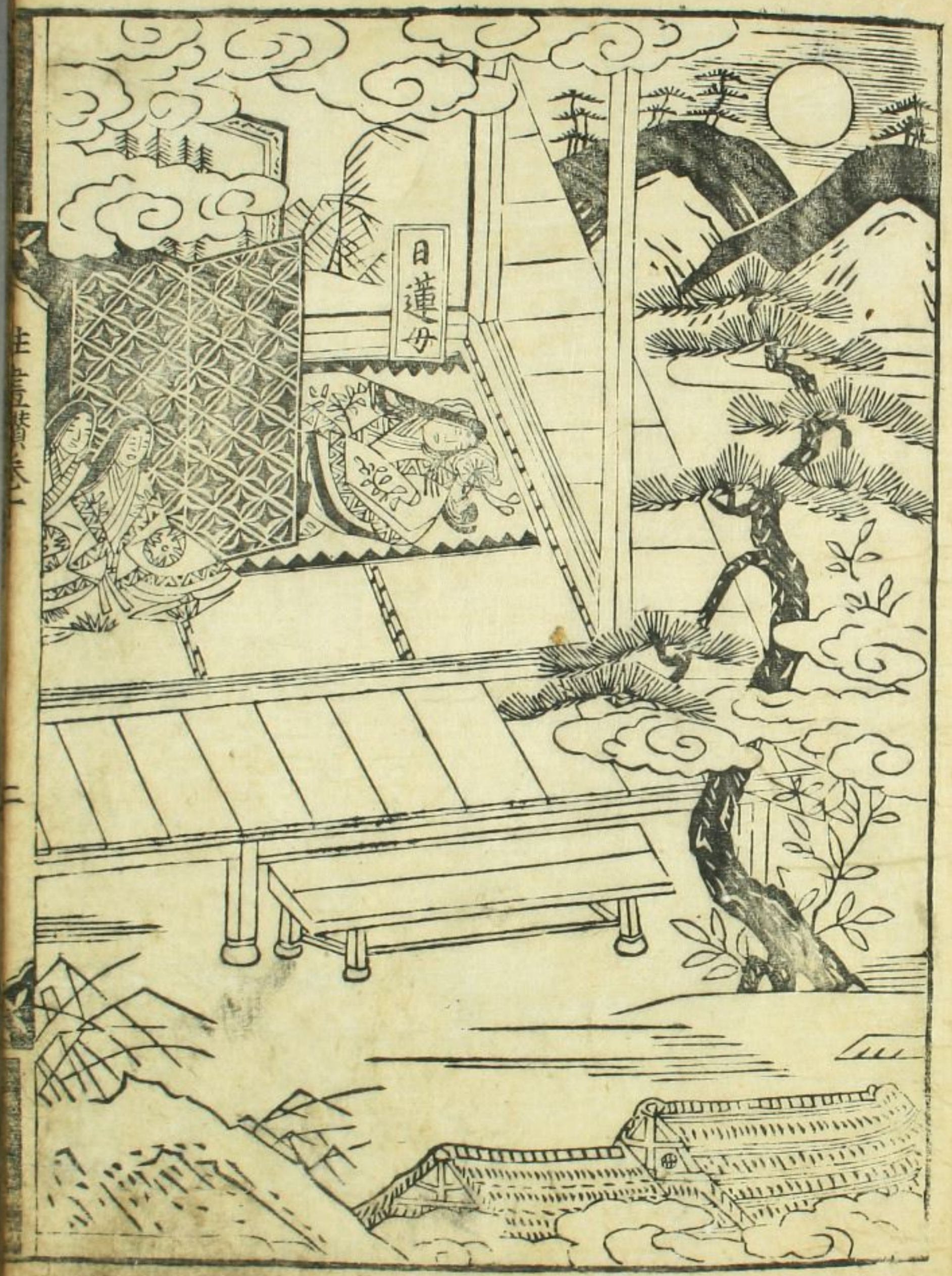
御書目錄第三十二



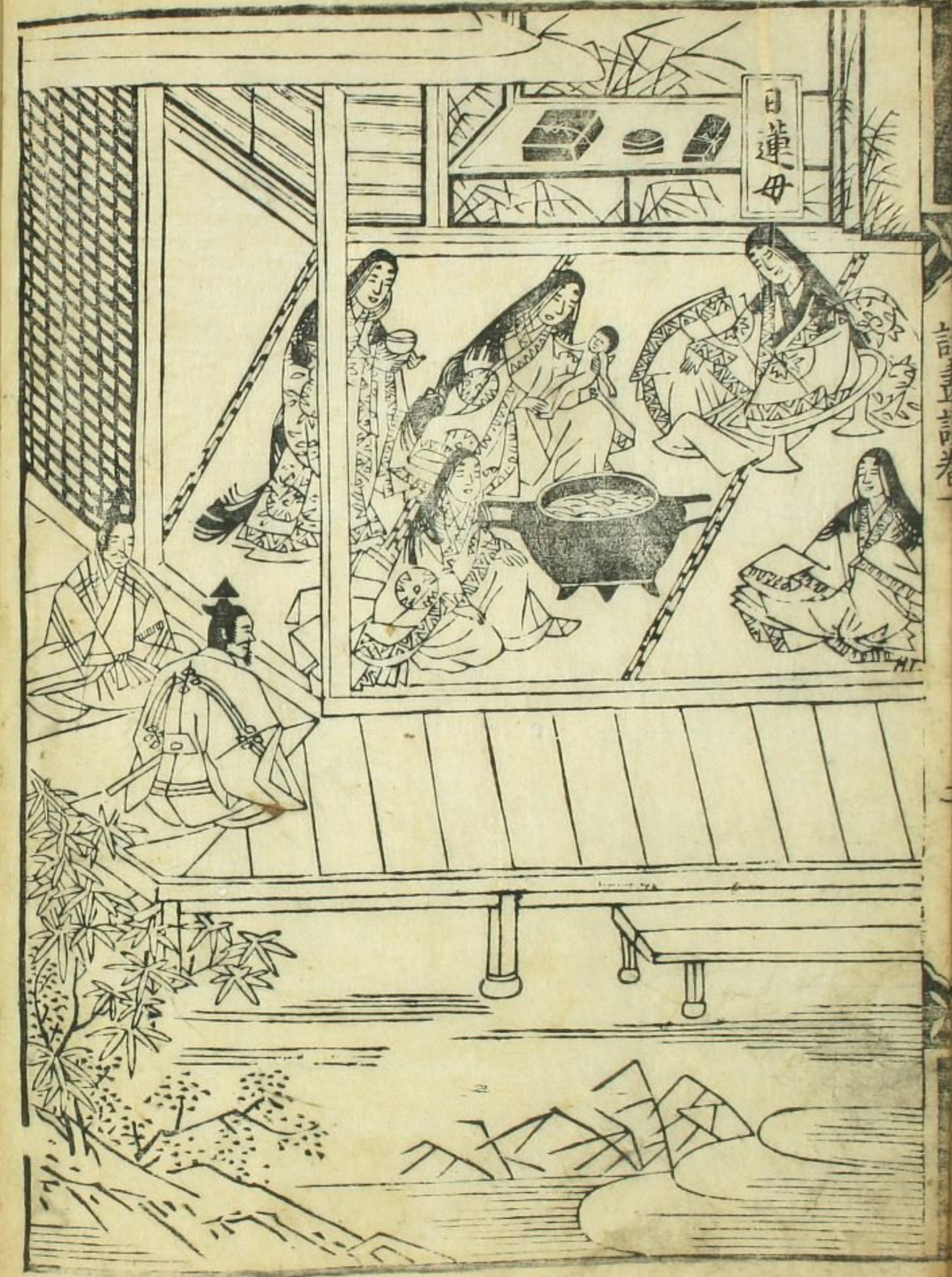
日蓮大聖人註畫讚卷第一

御誕生第一

蓮師の姓を三國氏父を遠江国の主貫の
 重實の志るし。重忠なり。日蓮を第四子。聖武
 皇帝のまのそし父を遠別。うらま。安房國長狹
 の郡東條の郷のくうと市河の村小湊の浦に
 まかされて。さよふゆと。なれり。母を清原氏なり。
 けふ。朝日を移し。志る。日天むの。とて。と
 と。夢。みる。結。て。け。し。り。し。て。八十六代。の
 御門。後堀川院の時。時。自應元年。み。の。し

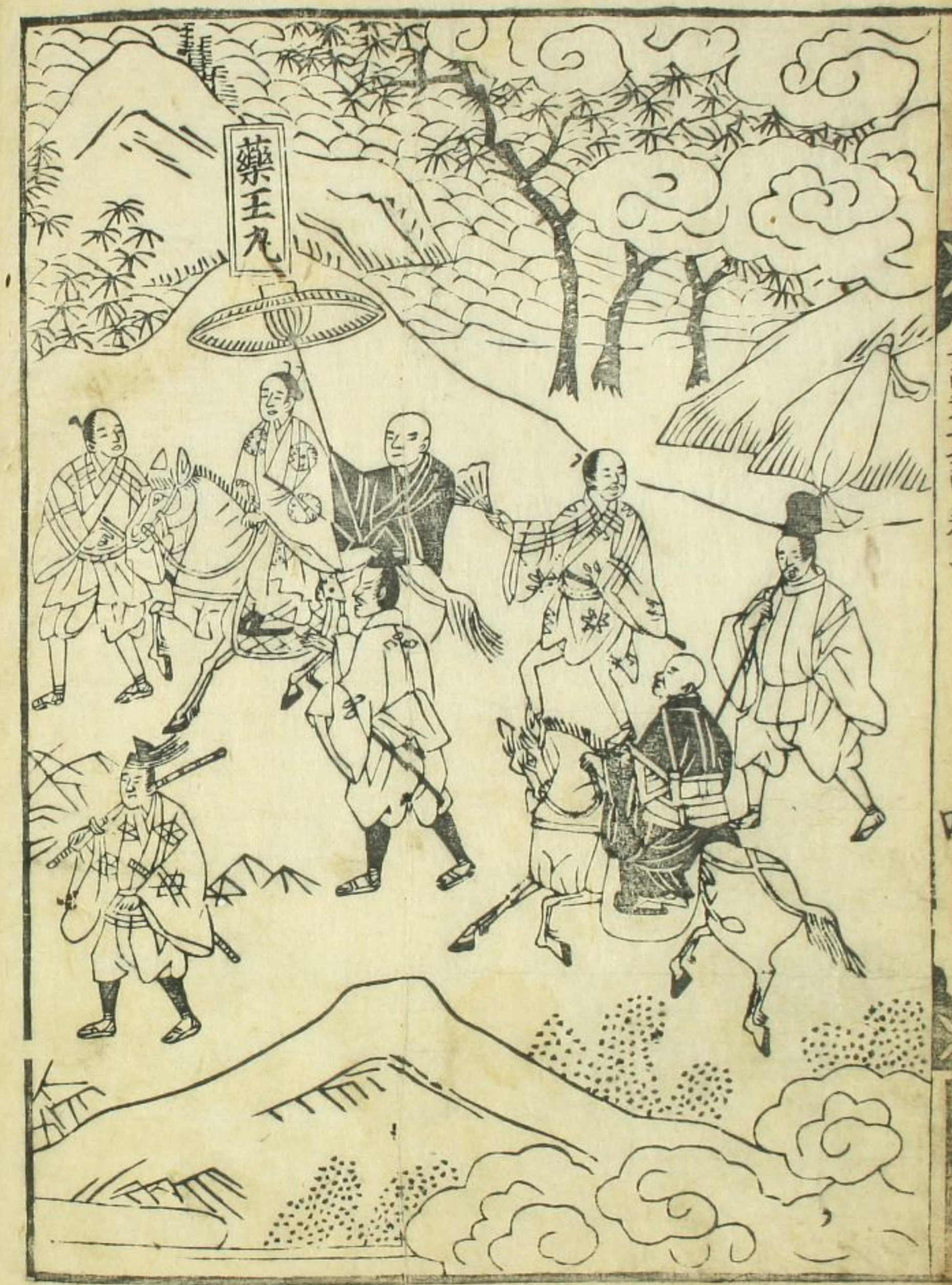
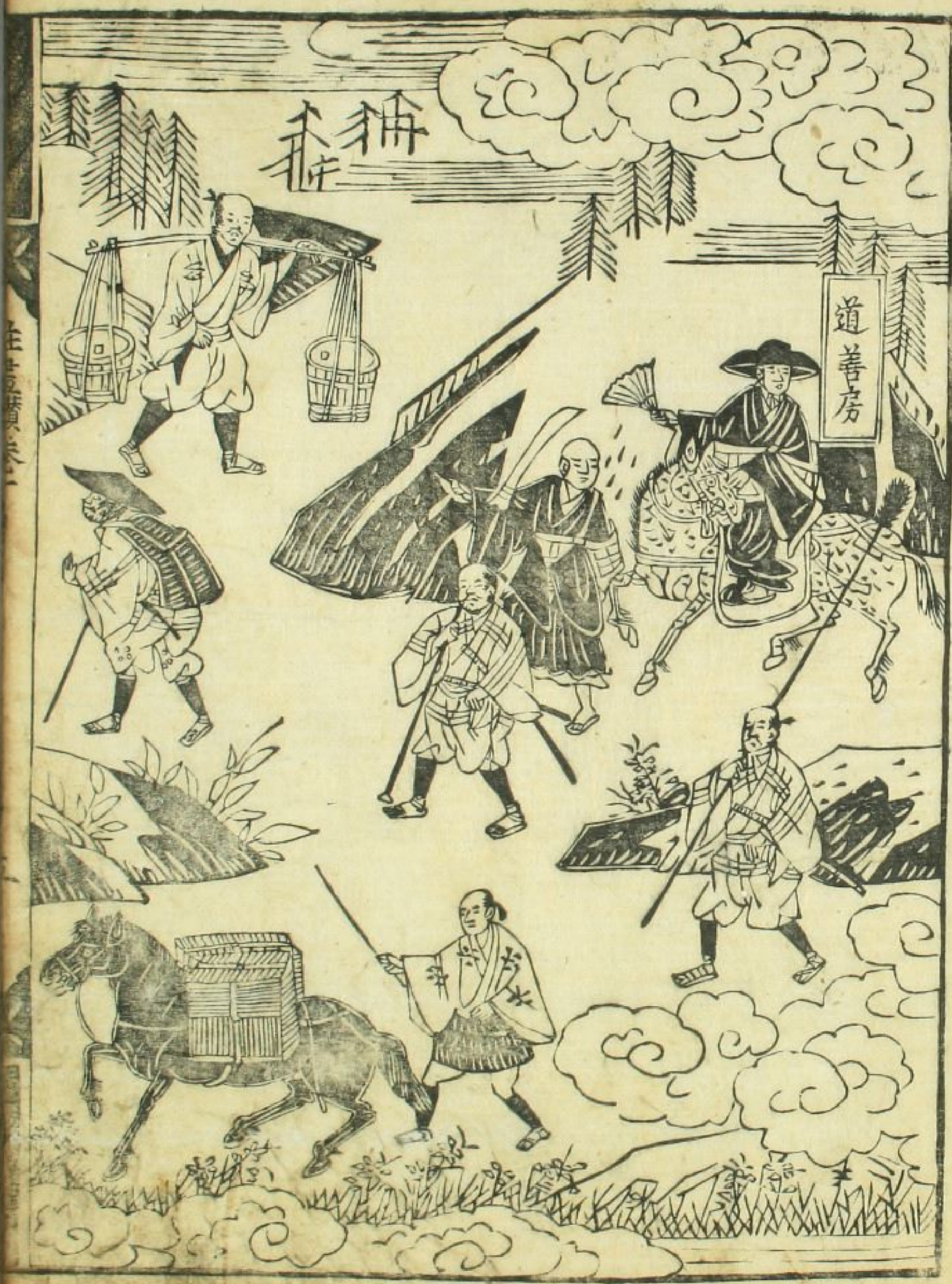


びまの二月十六日のびまのこくまのまれあへるに釋
 迦如来の御入滅よりこのこくま二千七百七十一
 年。如来を二月十五日も祿もし一海の日蓮
 や二月十六日。あらしをうるれに死生入り
 わづらうのゆへありばかゝるまよすこゝれあり
 いまのり日とりまのこくまのこくまのこくま
 うぬ湯の水とりまあり



上三巻

上三巻



言言言言言



學問第三

其後ひくろしよあつて。おと成千里
 ふさひ。ふまこところころをふ。まづつめま
 ろく。浄土宗をかくも。能化々大阿弥陀佛と
 ろす。大阿弥陀。まじし。まじやうらし
 血をまのく。十郎十生。たふゆへ
 こ建てすつ。そ後北嶺園城寺。一
 りしのもちやうまへ。やうをちつめ。し
 ひ。諸宗をう。ひめり

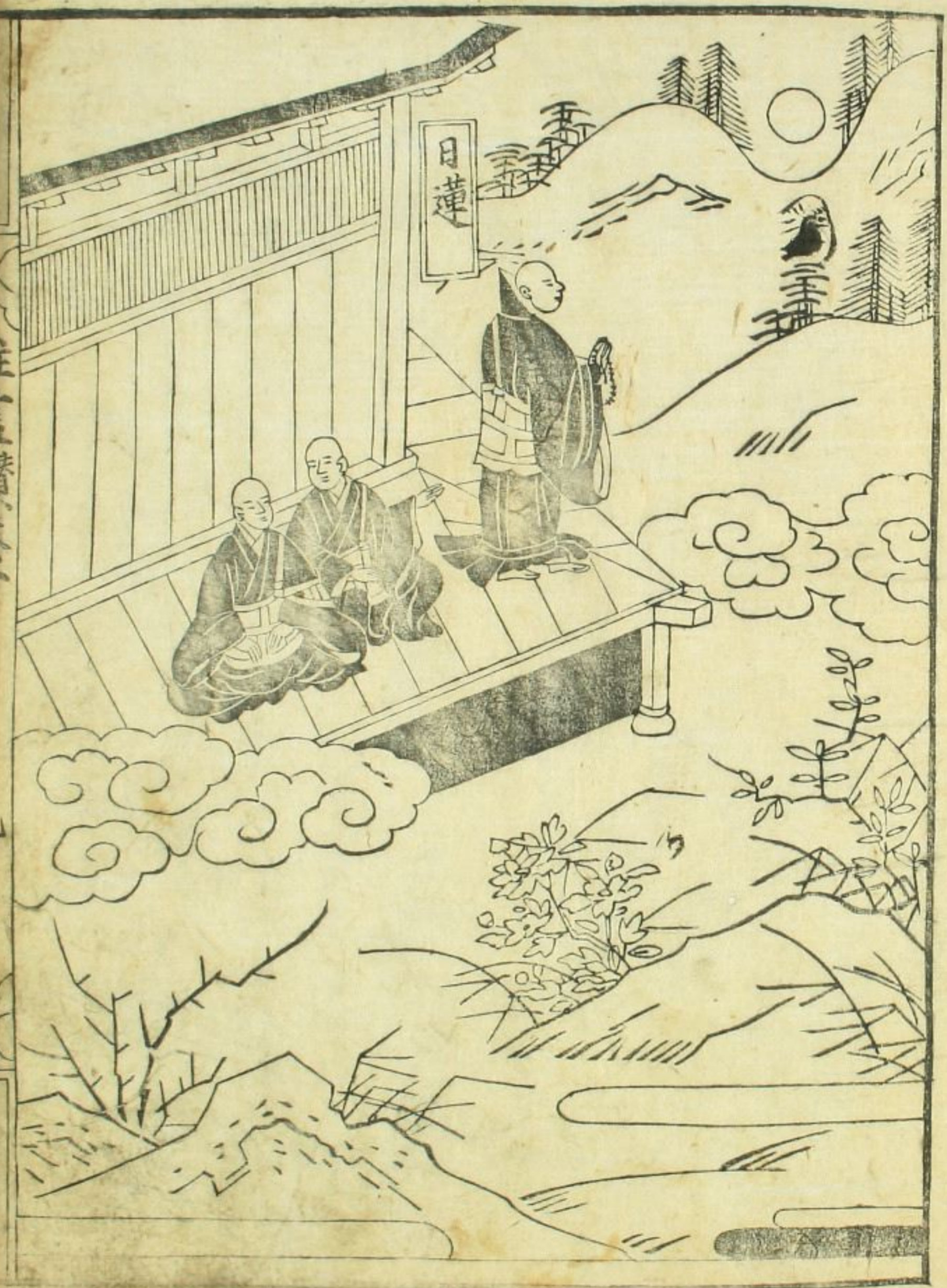


宗旨建立第四

年月... 日... 經論... 諸宗... 佛... 南無妙法蓮華經の七字とや

るへの... 清澄寺の諸佛房の持佛... 道善房... 淨圓房... 景信... 法華經... 淨顯房... 義成房... 寺

西條華房の郡青蓮房よりこの里の地頭
 念佛者よりゆへにふく悉嫉をこころいり
 とも堂供養入導師よりつひにうらまを言
 志まのせしとも日蓮はこころとちうつめをとり
 彼堂よりこのころへのみわづの無縁の弥陀と
 のと有縁の釋迦まつゆへに堂をたてて弥陀を安
 置もともむ。又阿鼻地獄をたつるのこころは縁
 ちうとたしづり一糸をせしとすまのこころ
 しのむらぬのおちいふまはしめぬ
 堂へしよりおちいふまはしめぬ



日蓮



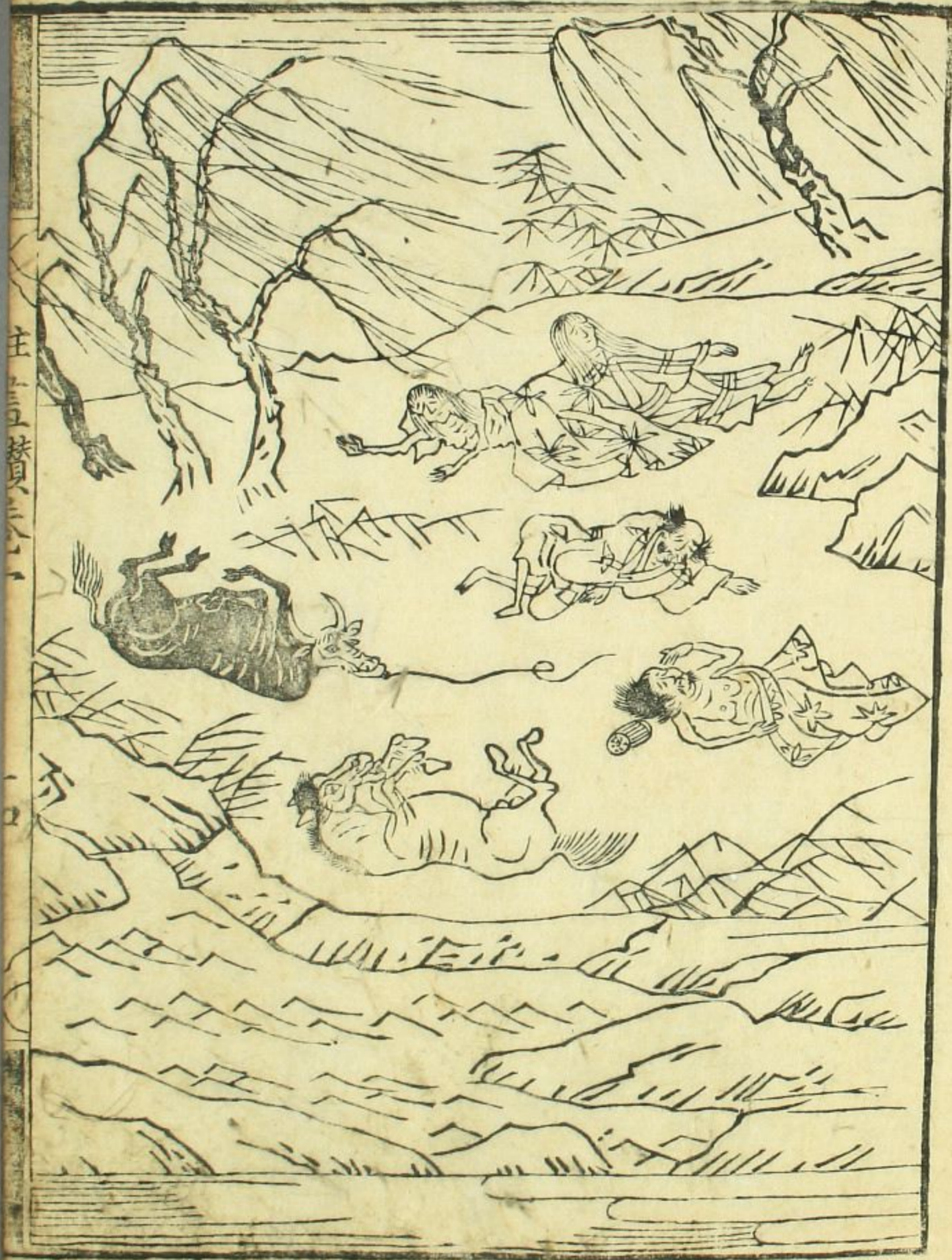




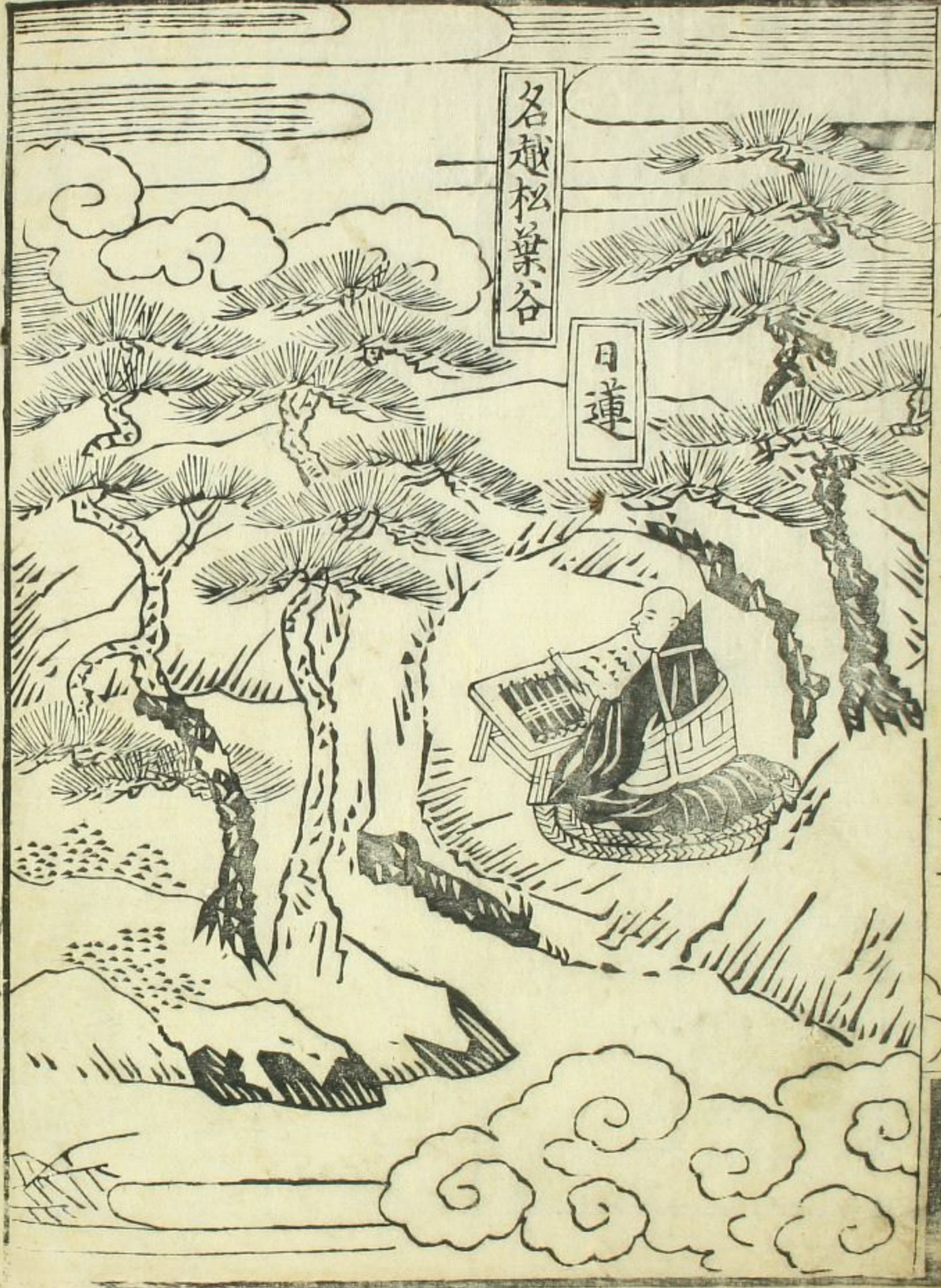
佛者おらをやうしむひのふも。のいんちを
 りらひゆりさ。は一門いんちよりあまか。る。泥た土ど。
 二度ふた天下てんかをら。のふ。
 くれけのちり

主言録貝公

言言言卷一



主
五
接
頁
三
八

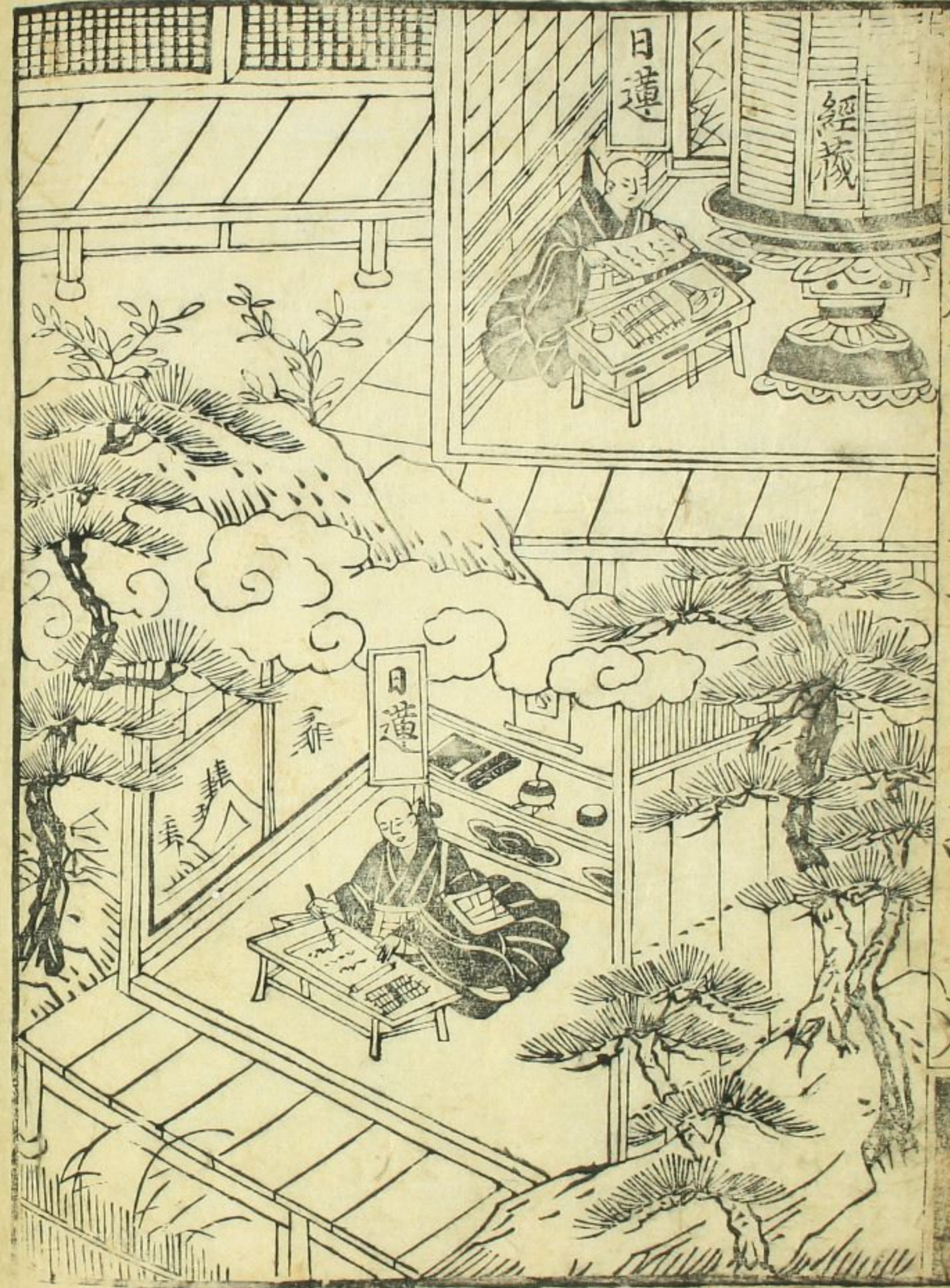
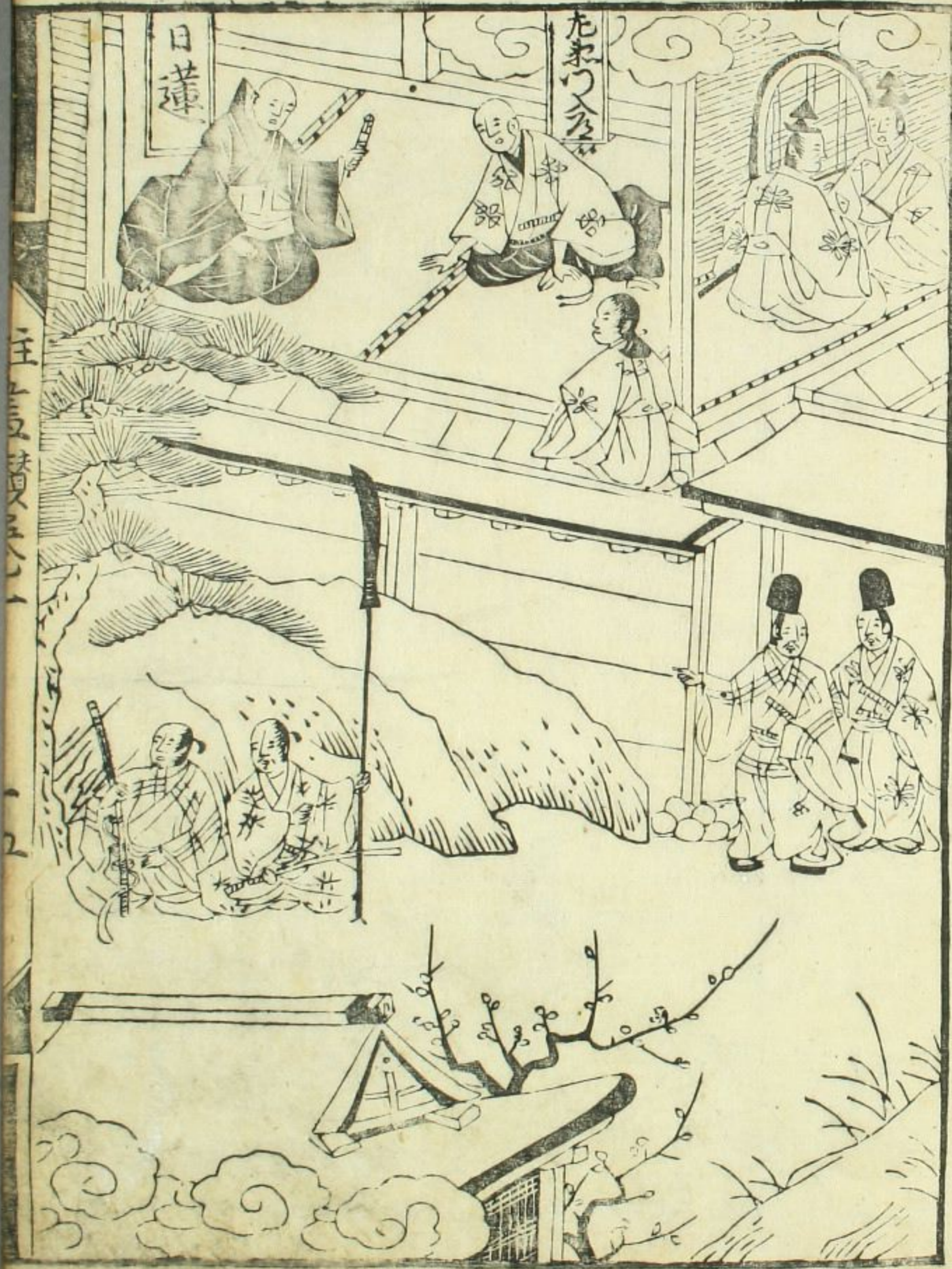


名
越
松
葉
谷

日
蓮

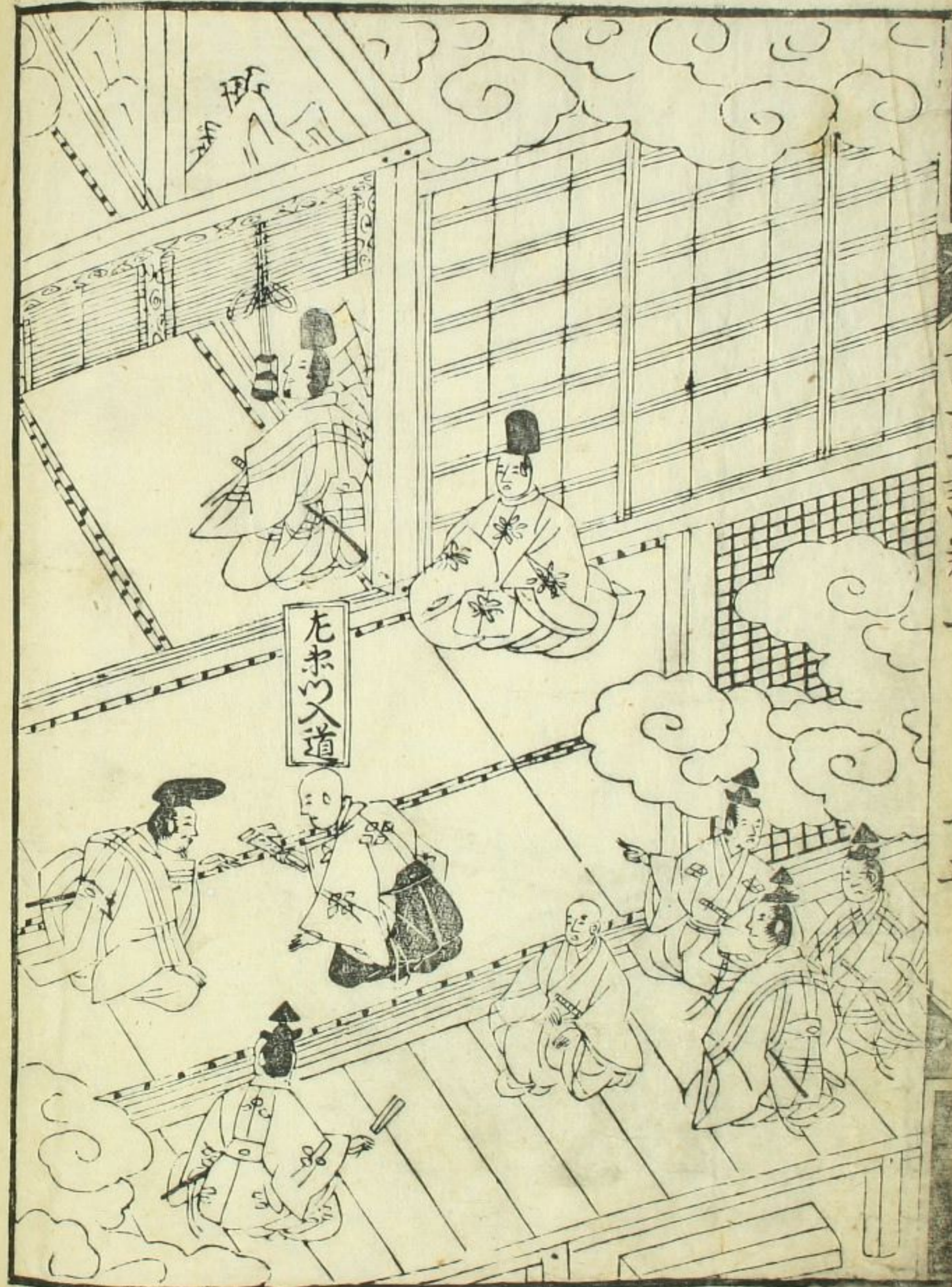
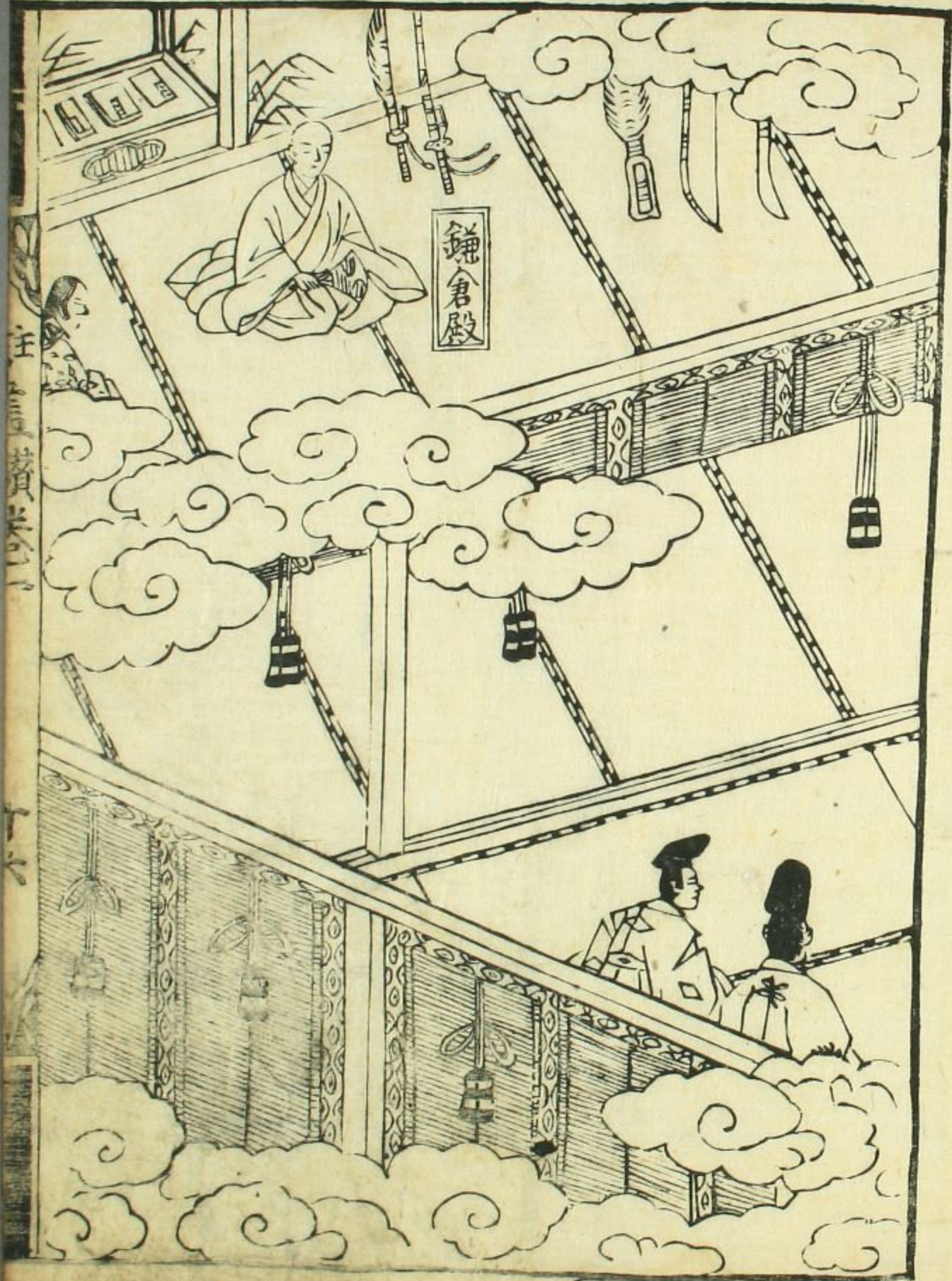
言
言
卷
一

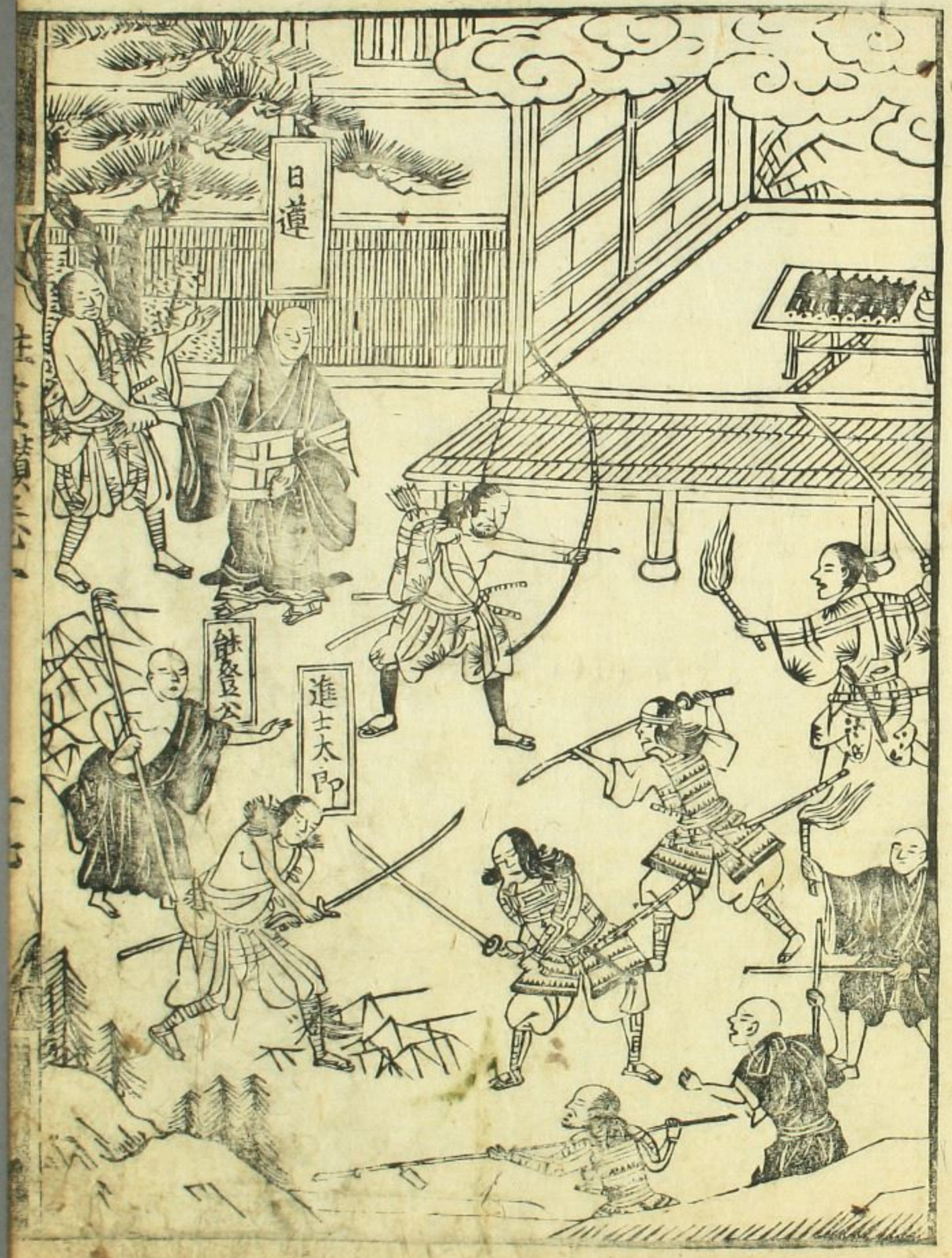
三



言書言書

十四





諸宗夜討第六

其後日蓮をるく。諸宗數百人。草庵へを
 きたりて。夜うらよせしとひ。日蓮おかせし中
 をなかり。そ夜うらいのをのり進士太郎。能登
 るらしおを進士の太郎とひ。うらよせしとひ。
 とくうらよせしとひ。建長五年よりこのころ。天
 下をいよめぬとひ。うらよせしとひ。

伊東左遷第七

弘長元年辛酉五月十二日。あつて二十の時。
 伊豆国伊東へへ。あつた。あつた。あつた。
 のお子も。あつた。あつた。あつた。
 だつた。あつた。あつた。あつた。
 井寺の智興法師。あつた。あつた。あつた。
 安部晴明。あつた。あつた。あつた。
 若命。あつた。あつた。あつた。あつた。
 誰も。あつた。あつた。あつた。あつた。

一人すゝ。あつた。あつた。あつた。あつた。
 ら。あつた。あつた。あつた。あつた。
 誰。あつた。あつた。あつた。あつた。
 ま。あつた。あつた。あつた。あつた。
 て。あつた。あつた。あつた。あつた。
 よ。あつた。あつた。あつた。あつた。
 の。あつた。あつた。あつた。あつた。
 へ。あつた。あつた。あつた。あつた。

かゝるをばし。寂照母をなほし。月
西の山へ入る。大唐も子なりと思。日東の
山も出ると思。和國も母ありと思。と
いひ。月の入ると思。日師日蓮伊東
も思。日の出ると思。日朝の
ありと思。ひし。袖を。杖と
杖と。由井の濱。ひ。舟守の
子の律。宿。舟守の
と。蓮舟。夫婦

ま。日あり。法華經。伊東。尉朝高。や。なる。い。あ





註畫讚卷第二

立像釋迦第八

は年六月朝高おのこころづゝひよゝゝ。薬師も
あつゝる。朝高綾部正清とけいゝゝ。
いのつとて日蓮も乞日蓮ゆるゝ。治りび朝高やさ
く。本服きゝ法華経をたのりもゝゝ。日蓮の
たまつゝ。是いゝゝ。かゝゝいゝゝ。法華経
を對ゝゝの訃詔あり。十羅刹女も争り驗あり
らしやと。但馬公日兼と。淡路日地と。師弟三人
ちゝ新法。ゆる病いの。朝高法華経と持海の

辨の中らりあつゝゝの。立像の釋迦と日蓮上
人よなるを。法華経ハ此ゝづゝゝひよゝ。十羅刹女の
せめるり。日蓮の身やゝゝゝ。治りびゝゝ。治り
ぬゝ故。隨身佛とや也。波うらさゝゝゝゝ
つゝ。法華経の自我偈とゝゝやゝゝゝゝゝゝ
あつゝ時。變化の人來り。日蓮聖人。向ゆり七日
を過て鎌倉より。津本意の救免狀來べし
とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
弘長三年癸亥八月廿二日。七日。來使ハ
但馬公日兼なり。奇特不思議の事あり

主書法卷第二



文永禁星第九

文永元年甲子七月五日。大せいつく出来つと。
 正嘉の大地震。文永の年。とくまかりし由事
 をいし。日蓮へ閻浮第一の法華經の行者とて。
 諸宗の大まじりやうの根源を明のゆ。然と國の主も
 民も。有智無智とも。あつこく。まはるものあり。
 諸天も。此行者を。あまひし。天の災を。のつて。志
 る。を。おろ。雲軍地神。彼惡敵を。いし。
 地の禍を。のつ。と。や。と。つ。と。が。閻浮第
 一の瑞相。爰。お。ら。天下の災難。年。の。あ。つ。つ。

世間の裏今より。後。海。ま。ま。し。蒙。言。る。と。数。万。艘
 の兵船。と。う。へ。て。日本國。と。せ。め。ら。上。王。位。り。下。民
 ぶ。ま。ま。く。閻浮第一の大難。遇へし。日蓮曰。此天
 地乃二川の災難。外典三千余卷。と。載。られ。と。
 爰一尺二尺一丈二丈五丈六丈の星。な。と。と。外典
 にも。明。を。の。然。の。内。傳。七。千。餘。卷。を。の。つ。て。是。を
 勘。る。も。く。く。大。る。く。災。と。大。唐。天。竺。日。本。の。内。の。ま。
 未。ん。し。と。災。也。今。此。趣。を。勘。て。立。正。安。自。論。を
 作。て。最。明。寺。入。道。殿。に。奉。つ。も。其。狀。い。し。く。此。瑞
 相。他。國。も。此。國。を。り。ら。げ。と。へ。し。と。り。

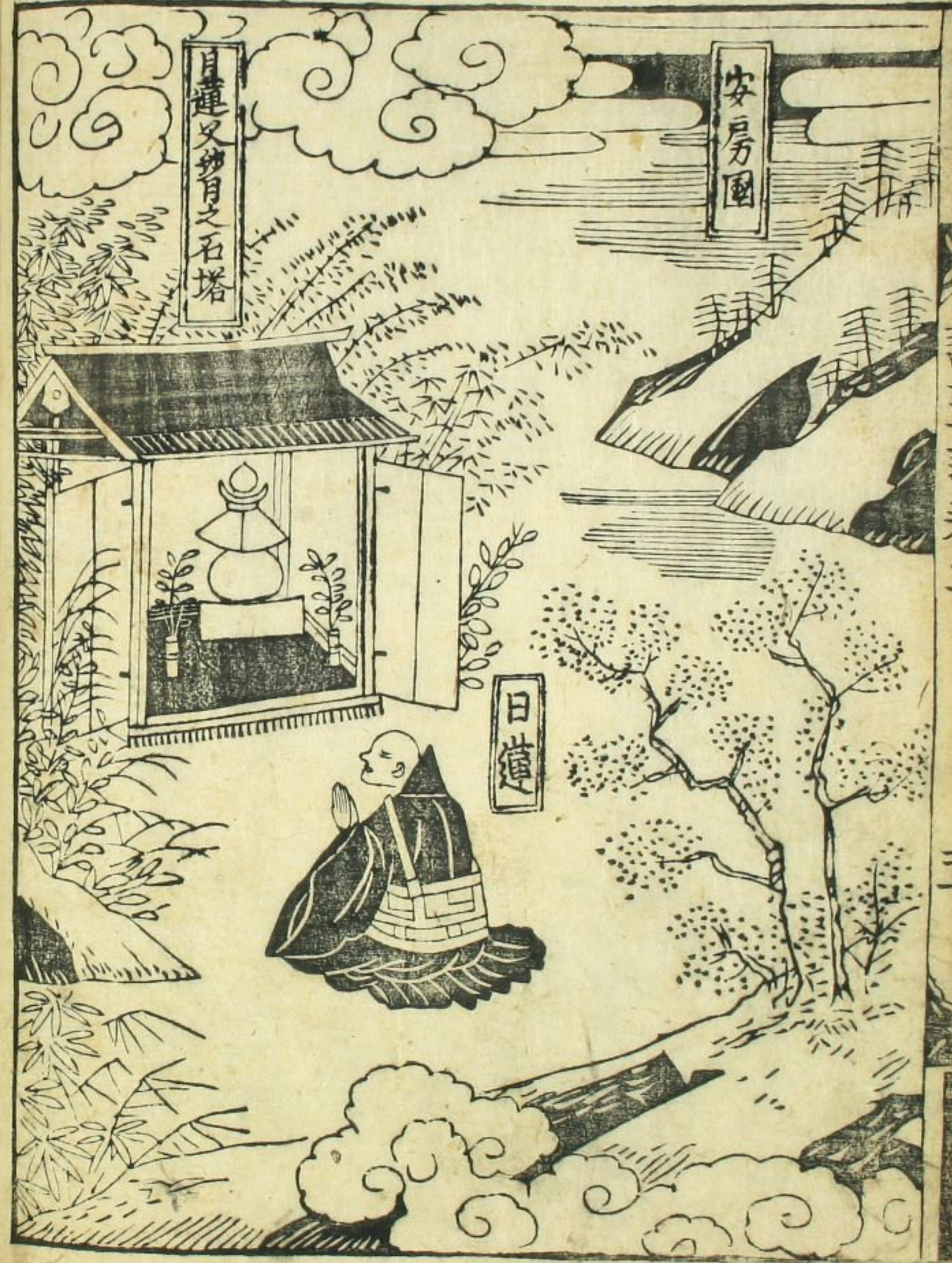
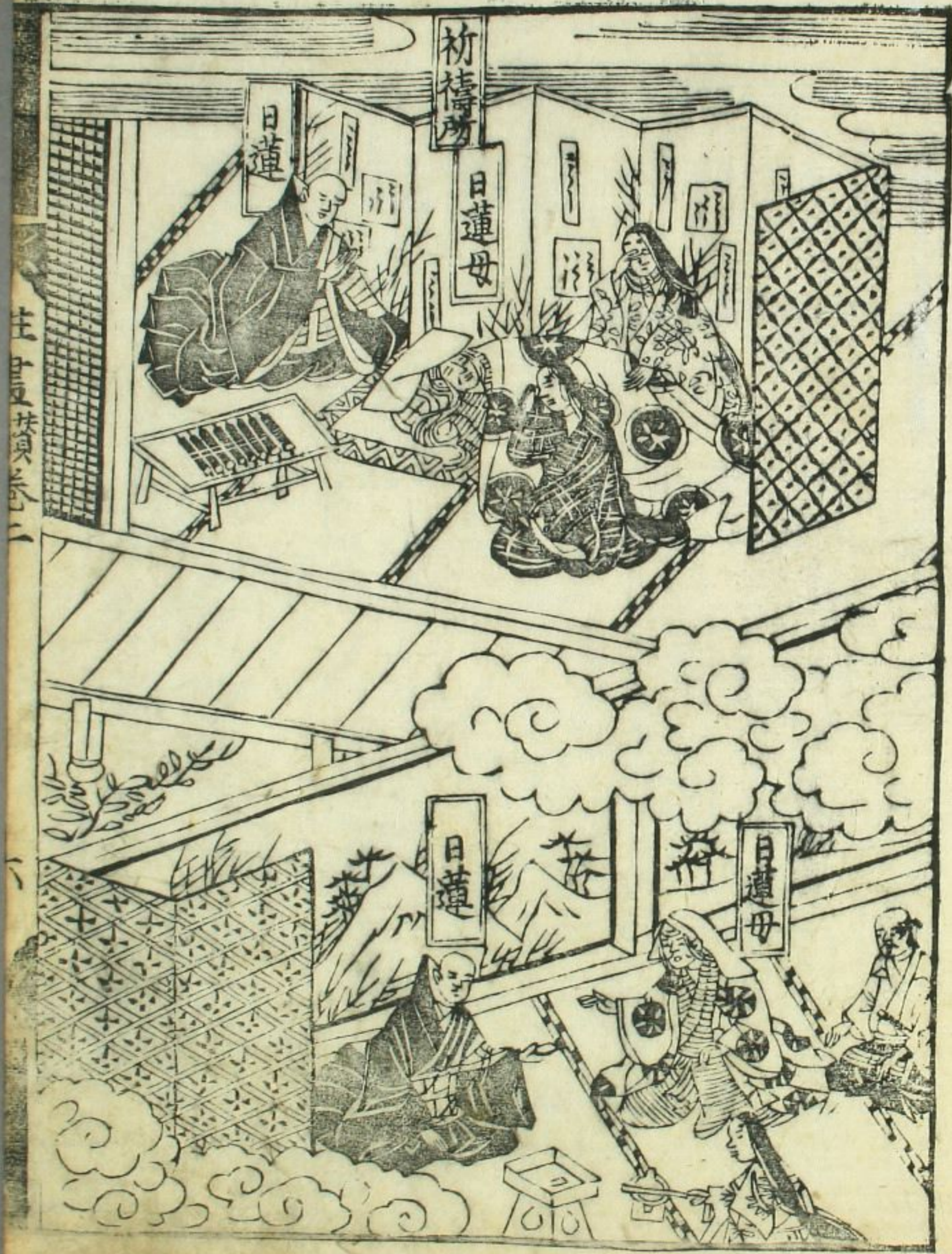


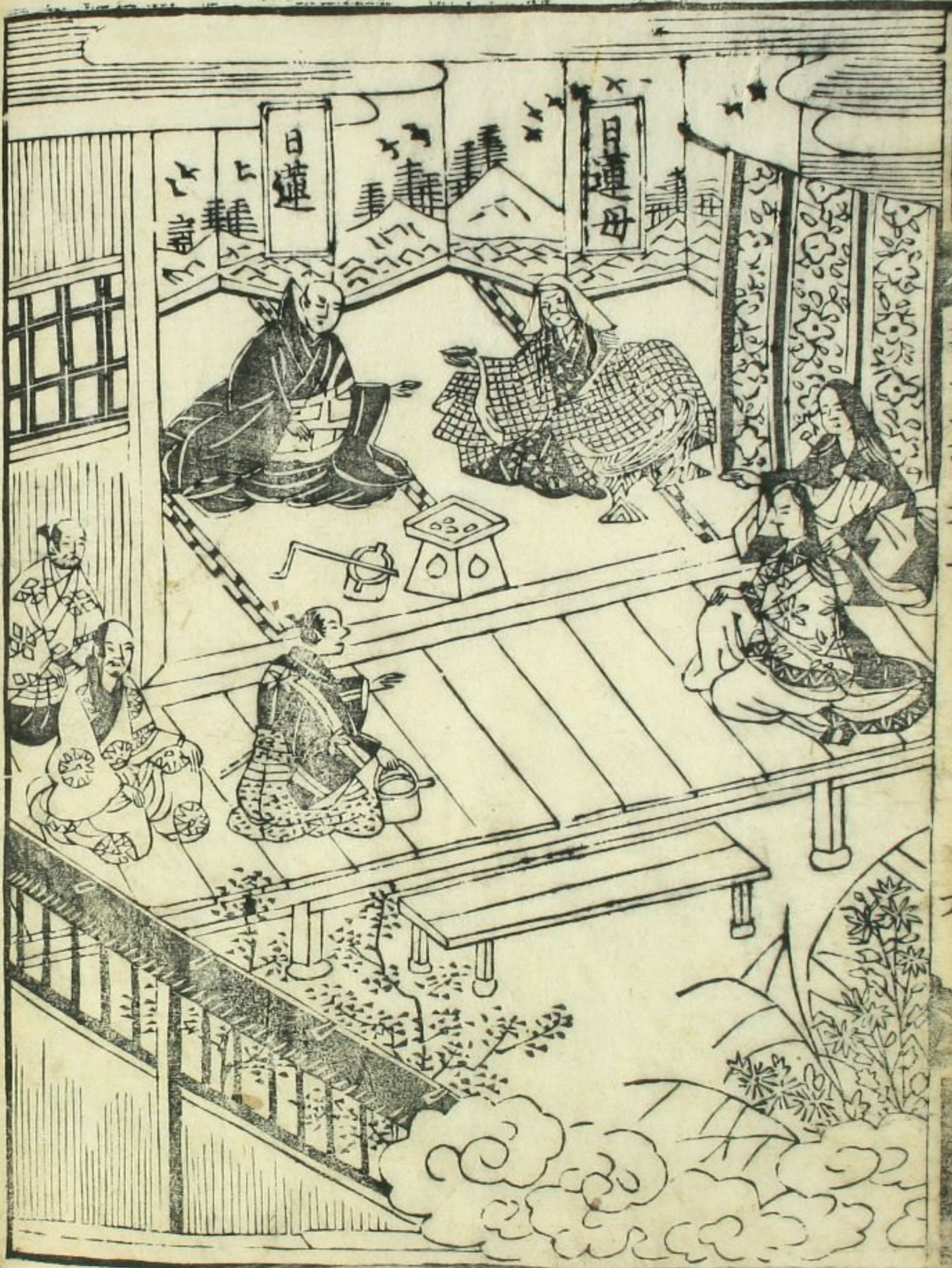
慈母蘇活第十

此年の秋、八月二十四日、
 入す。この日、父の病もよす。母の病
 うやむげとまじりて、七十九あり。老
 母、たまあう。梅もさき、さきひぬ。慈母共
 頼り、つらひ死。日蓮も。こもいんども
 ちひなむ。我ひろむ。法華經、日本國、流
 布もくへ。母の命を助けへ。華とて、水
 をじす。ひ。法華經、とて、そのいんども、つらむ。此年。
 のまうへ。命を、延後、四、年、か。いんども、事、た、な

法華經卷之二

五

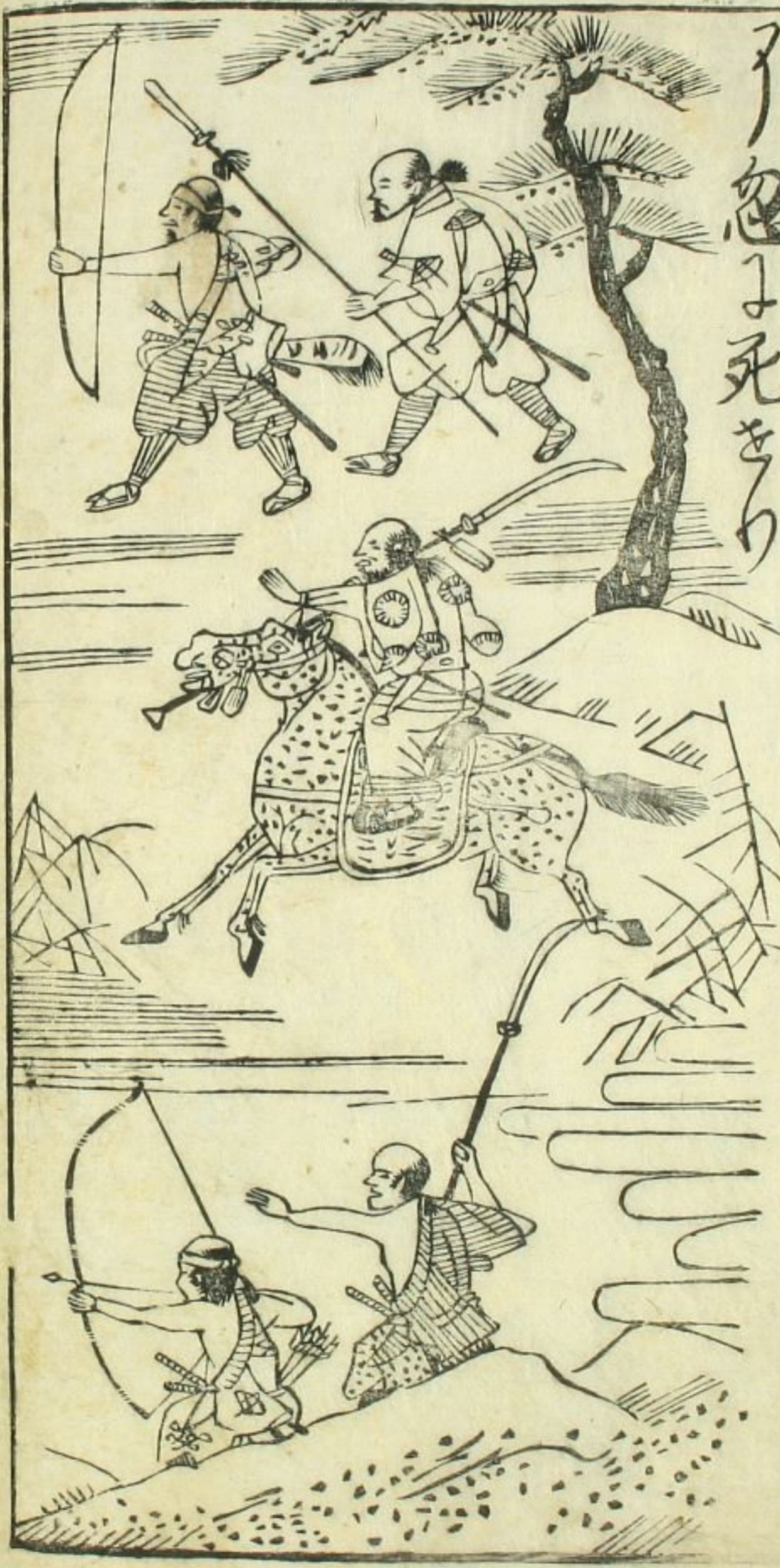




東條被病死難第十一

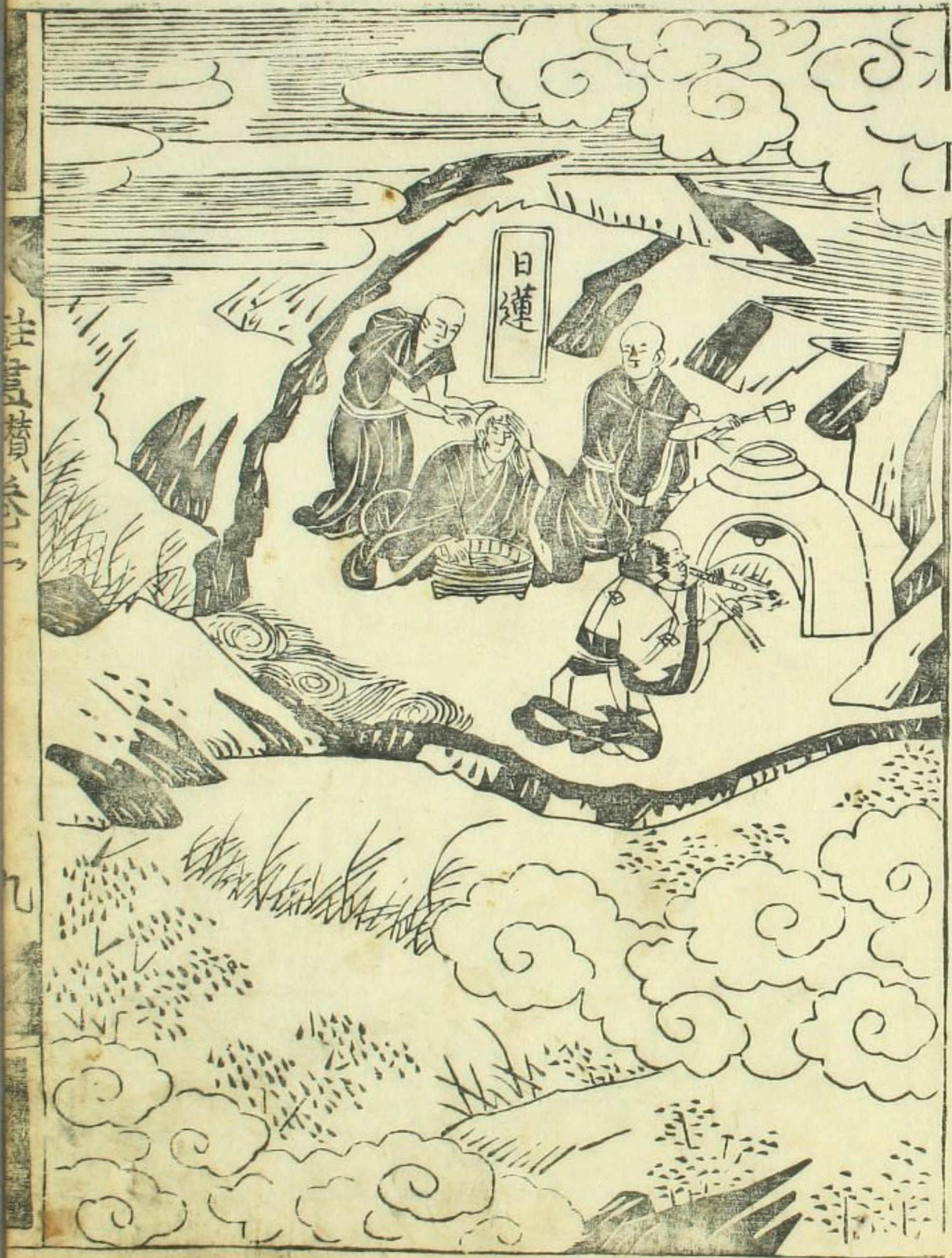
同年十一月十一日景信のちられ前乃大道を過
 流ふ。申酉の刻は。景信ののあををど
 ぎんとして。一門乃郎從數百人。道をのへきり
 て。是をのこむ。日蓮の侍供十人。なつ。矢や
 雨のこも。太刀や。いさび。ののこも。侍が子
 のきやうめ。し。う。う。せう。うん坊。てう
 めい。う。た。う。病を。う。の。景信。日蓮
 の。の。べ。と。さ。の。湯。首。を。の。ん。と。す。時
 太刀。し。く。は。れ。と。又。矢。病。あり。虎。の。雨。半

生身被病死難第十一

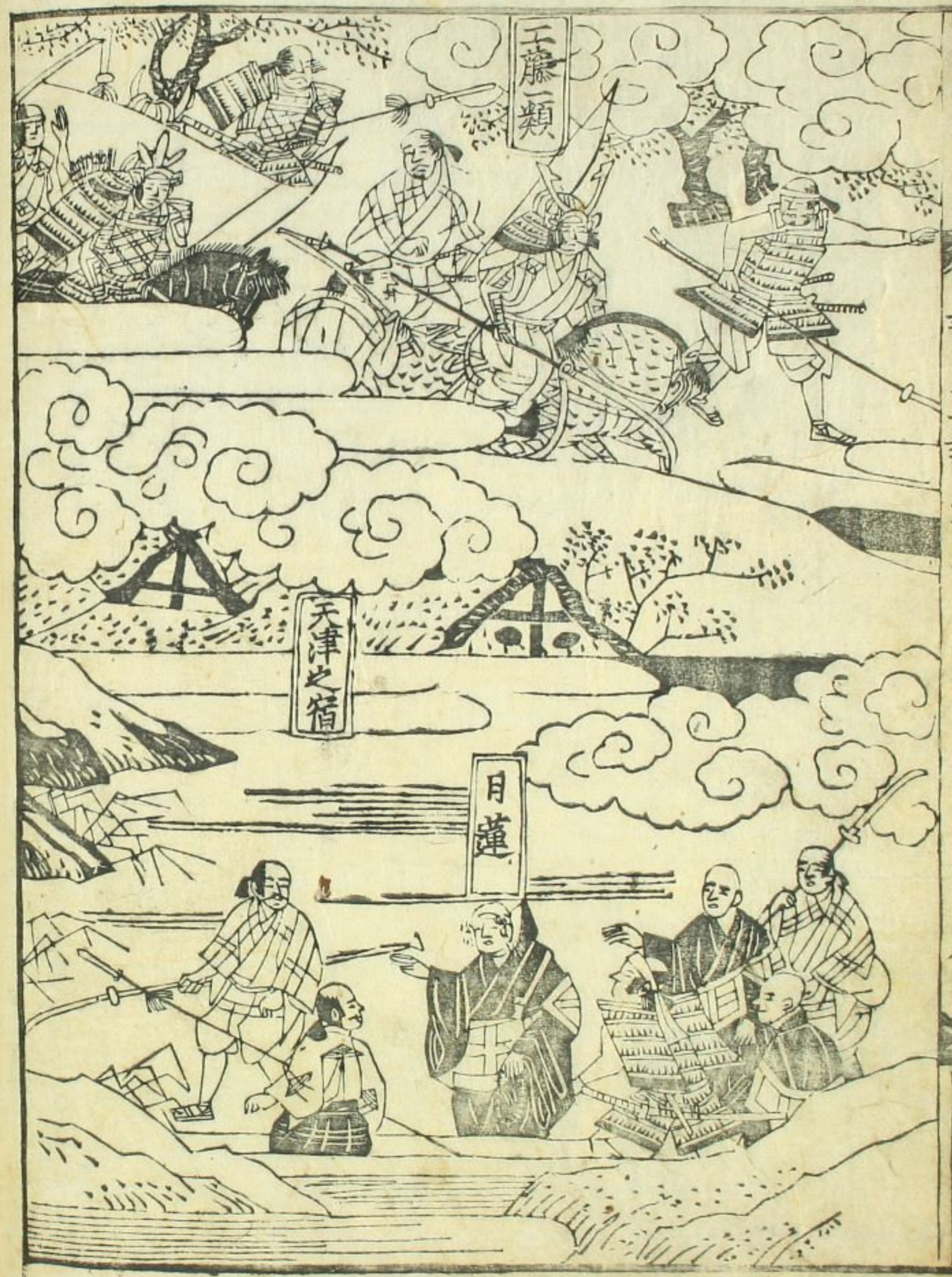


をうらみまらと日蓮をいしよとるまの天津乃
 村をくまの山荘とほくろひの録倉へをり
 なる。景信と十羅刹女のせりといひ七日の内
 了忽ち死せり

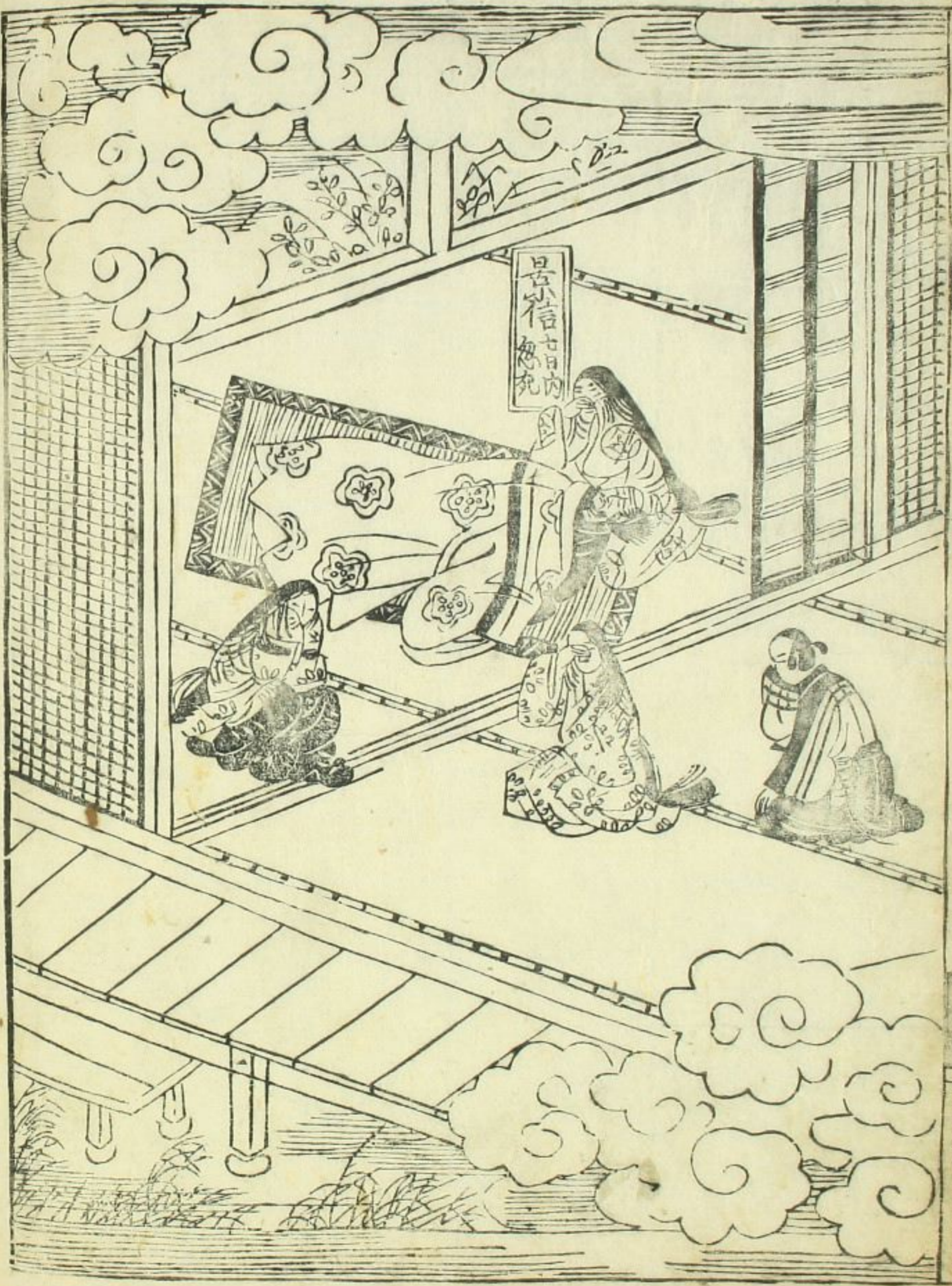
言言言言言
 七



法華經卷之六

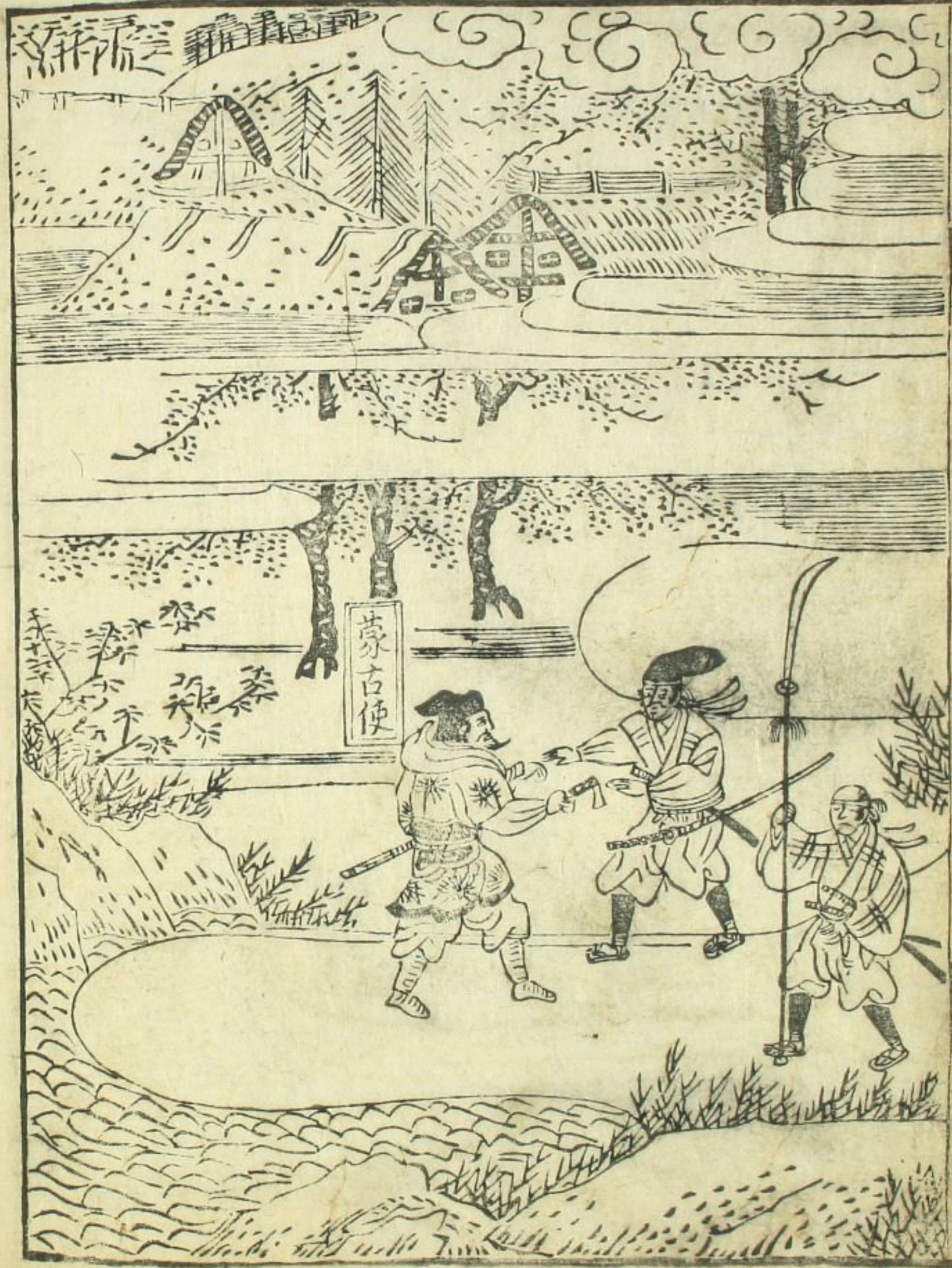
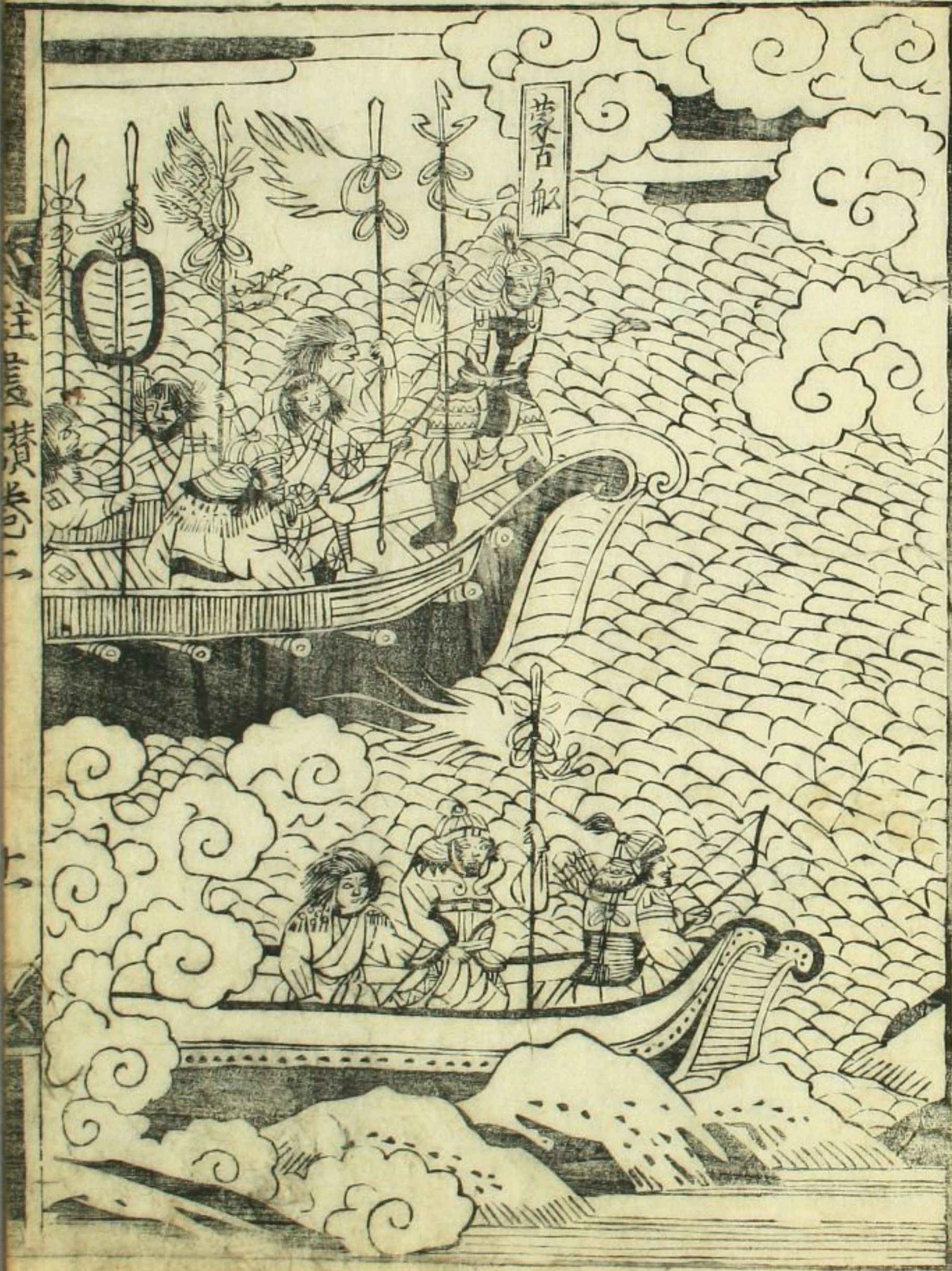


法華經卷之二



蒙古状第十二

人皇九十代龜山院文永五年戊辰洞正月十八
 日大蒙古言國より日本国派をうへへし
 の様状来る。蒙古右のつひひ毎夜ゆくの地を
 めぐり。舟の津軍乃場。くわくを思をこつし
 人のまじきくを相し。所の案内をみくゆりぬ



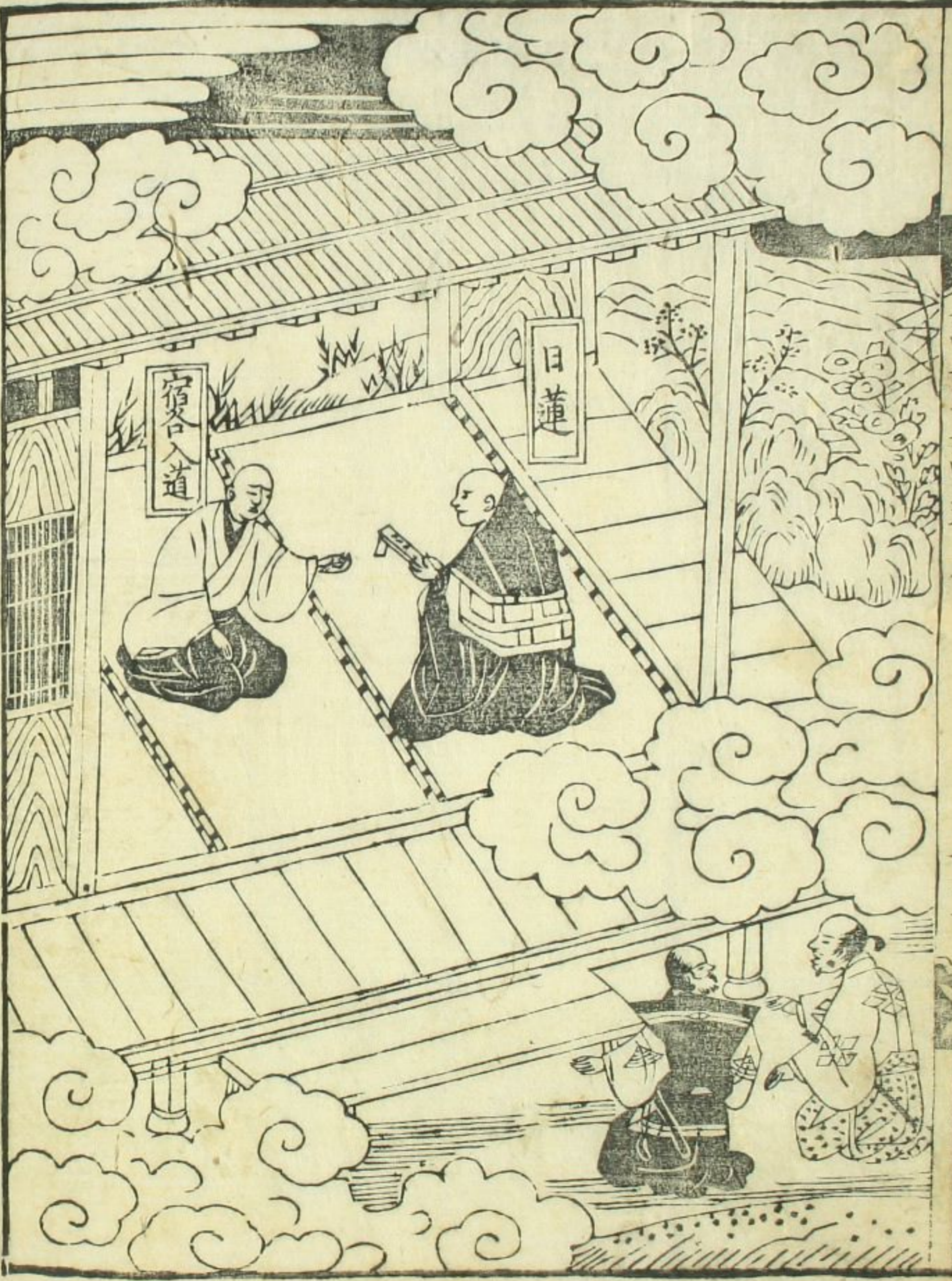
十一通狀第十二

父應九年八月廿五日。宿谷入道よつゝの
のふ狀よいそく。經文のよくくるも。彼国よるも。
此国をよめし事よ。必定るり日本國中よ。日蓮
一人調伏すへさきよ。よひて是をしつよ。是と勤
るも。君のよめ国のよめ。神佛のためたも。
かいせうを。よつふつ。又同年の十月。十一通
之狀よ。よつゝのふ所十一処也。鎌倉殿。宿谷
の入道。平虎東門。弥源太入道。建長寺の道隆。
極樂寺の良觀。大佛殿の別當。壽福寺の淨

光明寺。多宝寺。長樂寺也。弥源太よつゝの
のふ狀よ。よつゝ。法華經を謗するものハ。三荒
のろく。の佛乃大を。してさるり。天照八幡大
菩薩。此国をよめ。のふゆへよ。大蒙古國よ
つと。狀よ。今よ。後を。のよ。よ。よ。
も。他國の奴とも。よつゝ。良觀。よ。よ。よ。
狀の畧。よ。よ。よ。日蓮ハ日本第一。法華經
の行者也。蒙古國對治の大將。よ。餘も。畧す。
あつひも。仗を。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。
よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。

る連ともひろくきひ。其時聖人乃才子且那
る。決るるの状より。定て日蓮の才子且
那。流罪是一定なり。しがもせらるるも
連。日蓮の取をのく用ひあふし。がも
妻子眷属をばらるる。此より生死乃
まづまを切く。佛果をばらるる。あひ
ぢやうに。あひをばらるる。あひをばらるる。
ひをばらるる。才子なり。所領ありん
もの。是をばらるる。あひをばらるる。
あひをばらるる。あひをばらるる。あひをばらるる。

東夷の合戦二年。日蓮の
蒙古の状来り。日蓮上人は。日蓮の
ふちのく。日蓮の神通。日蓮の
つと。日蓮の。誰か。日蓮の。
此書を佛のみ。日蓮の。日蓮の。
あひをばらるる。あひをばらるる。



註畫讚卷第三

雨新勝負第十四

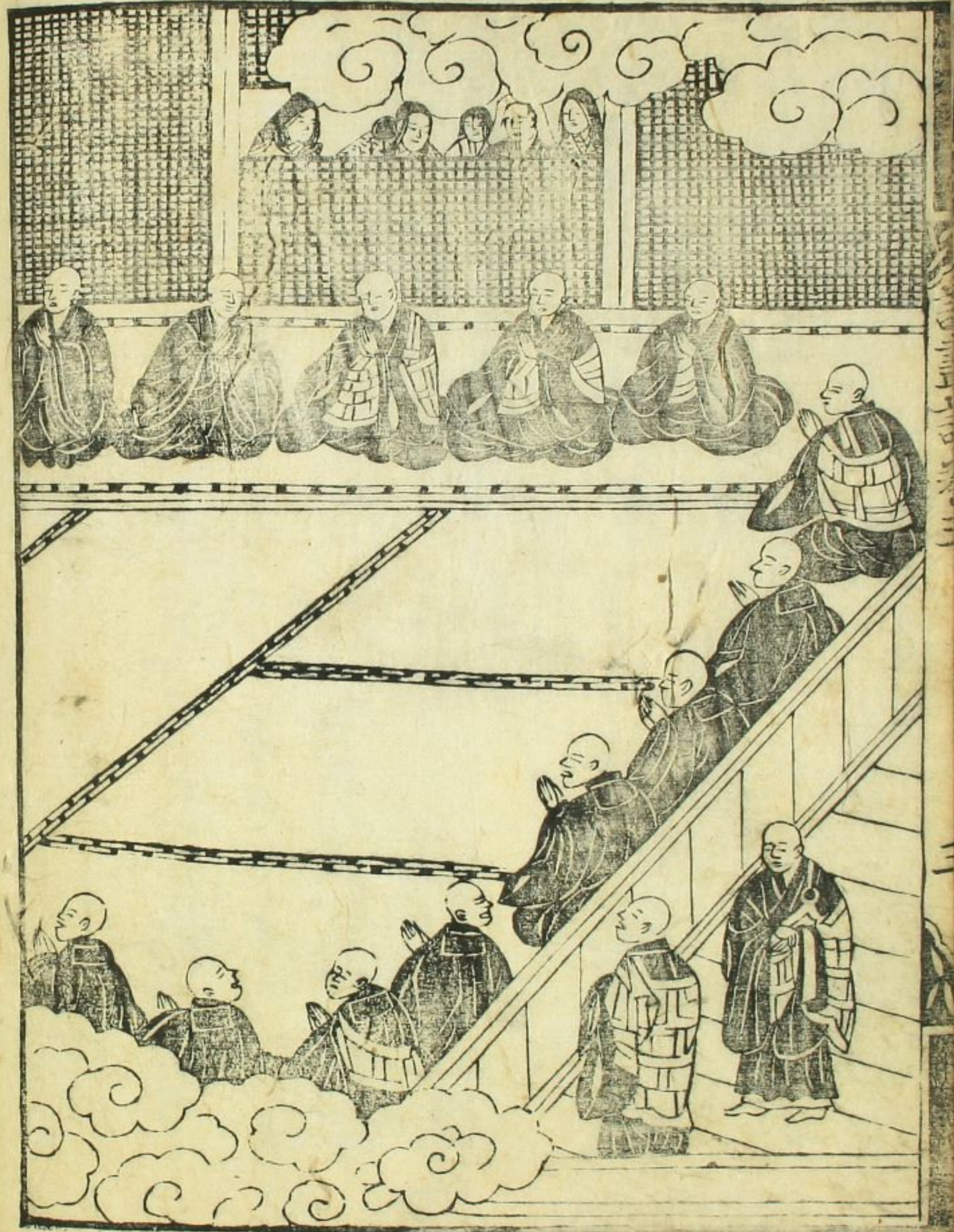
文永八年のころ。ある日。性房のい
 ろく。佛法のちろくをあらわし。さう
 て雨のいほり。聖人のいほり。雨の祈り
 あらわし。佛法のちろく。佛法のちろく。あ
 らわし。天下世土の王民。正法をあらわし。佛
 法のちろく。法華をあらわし。日蓮のちろく
 諸天龍神。いほり。あらわし。あ
 のちろく。良觀の文埋。あらわし。あ

とあるしゆのゆへに、
てさうするしゆを、
くぬし、
佛入行者がるる、
もる。こもる、
肉、
百五十戒、
り、
て。法花經をな、
日蓮が、

ひ、
僧とあり、
ま、
ひ、
一七日、
あ、
る、
た、
あ、
て、

たしゆよ人のつひをきつりてくわんくわんせし
し。和泉式部わいせんしきぶまごのこれ女をんな也能たす目法師めぼうしを破戒はかいの
りのるのまごにた良觀らうくわんの戒門かいもんよせびやく終すまひ諸しよれ
和歌わかをよみし。たちもらうの雨あめをあつとちう
る忍性にんじやうの持戒ぢけい清淨しやうじやうとつりて。慈悲じい第一だいいちとあ
ゆしとちうのまごに雨あめの祈いのちをのつて。まごの
よまごし。まごのまごに雨あめをあつとちう
じやう大事だいじなる後世ごせ往生おんじやうよをひてとちう
まごのまごに雨あめの祈いのちをのつて。まごの
ら法はうをよみし。まごのまごに雨あめをあつとちう

はつりし。まごのまごに雨あめをあつとちう
くらをらるるまごに雨あめをあつとちう
まごのまごに雨あめをあつとちう
まごのまごに雨あめをあつとちう
まごのまごに雨あめをあつとちう
まごのまごに雨あめをあつとちう
まごのまごに雨あめをあつとちう
まごのまごに雨あめをあつとちう
まごのまごに雨あめをあつとちう
まごのまごに雨あめをあつとちう



行敏り狀第十五

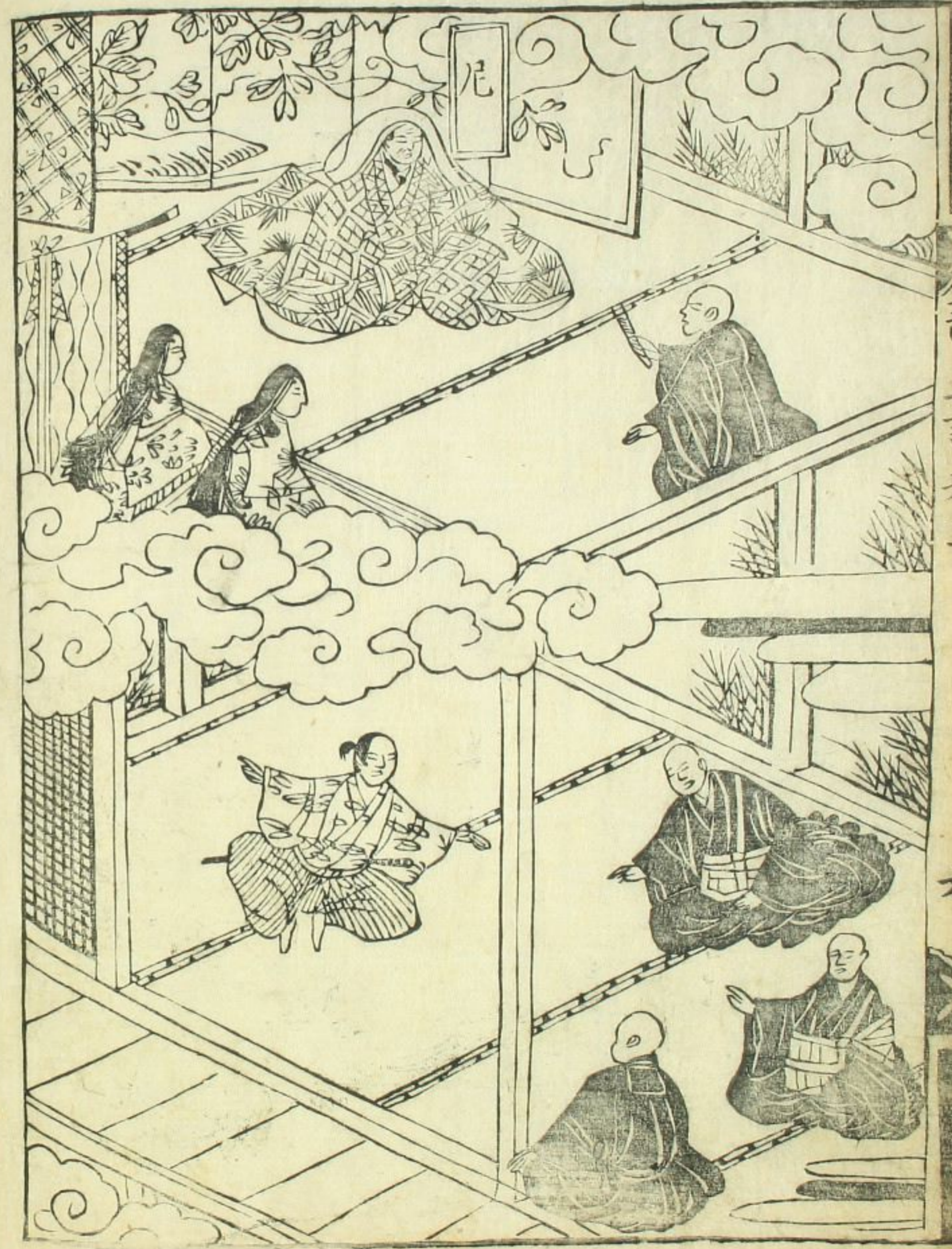
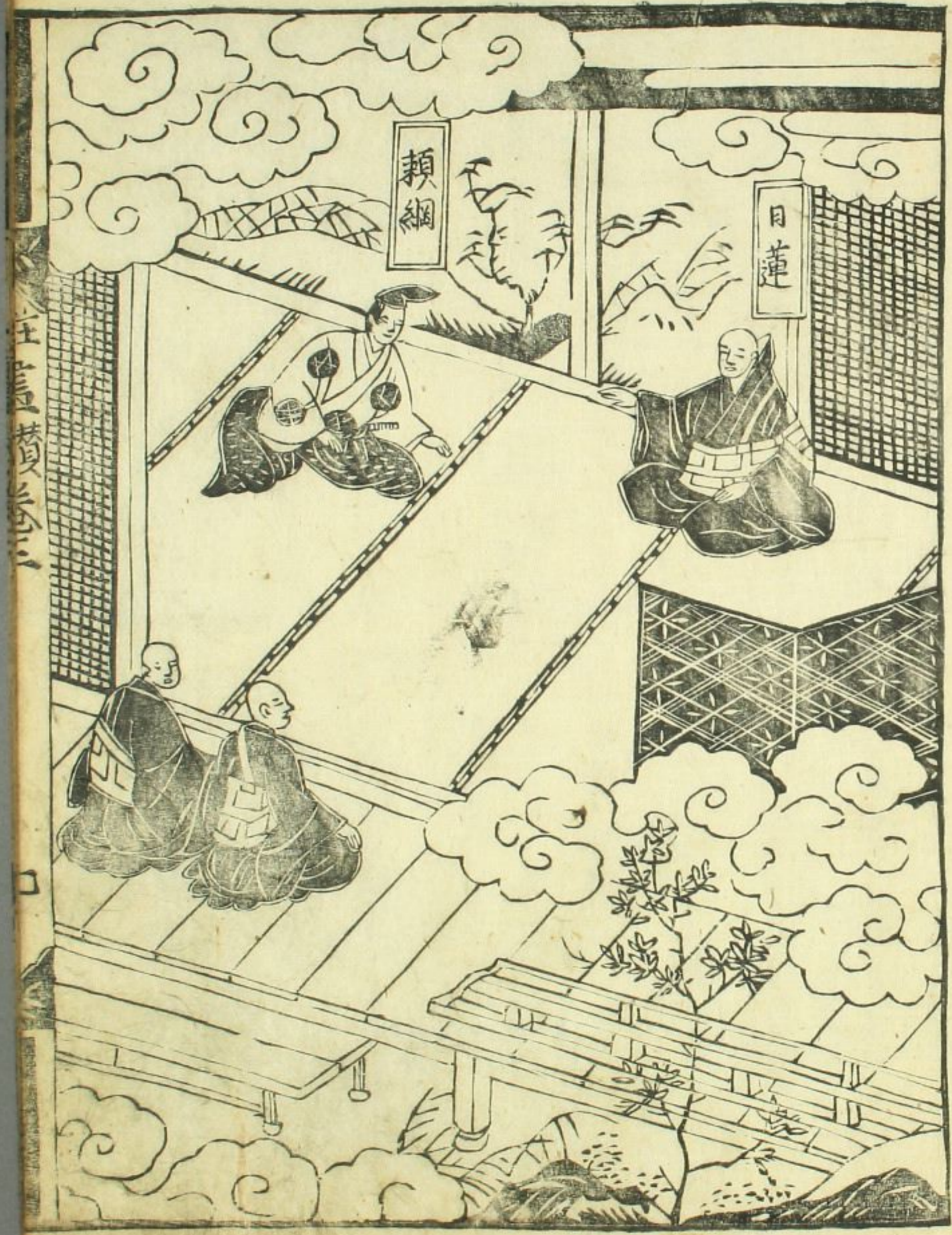
良觀もつる事あり。事あり。法華の
りまこ才子念阿弥道阿弥。行敏りつる事あり。法華の
しよあつる事あり。行敏りつる事あり。法華の
もく日蓮ひとり法華一部そのものとして
るのよれ大小乘の法としよあつる事あり。法華の
しよあつる事あり。家の由なり。行敏りつる事あり。法華の
内ありつる事あり。日蓮が造意のこゝろなり。法華の
は類も。末代争の事あり。行敏りつる事あり。法華の
の守護地頭雜人もあり。日蓮も。

ひよ才子もつる。阿弥陀佛を火より氷よりを
りあるしぢりたり。大悉敵る。頭とされ承領お
をうむへとす。又真言宗の僧數十人。禪
宗の僧数百人念佛者数千。近習の女房尼
あなごよつゆゑ種々のつる事あり。日蓮も。
日蓮も。故最明寺殿を無間地獄もち。法華の
申。建長寺。壽福寺。極樂寺。長樂寺。大佛殿も
焼拂へ。申。法門もつる事あり。日蓮も。
もやつる事あり。才子もつる事あり。日蓮も。
も。流罪もつる事あり。日蓮も。

我わがねがひをしてまはりしるをいふべし。師し子し尊そん者者のあらはつて天てん台だい傳でん教がうの妙みやくなる功こうも
あらはししと。日にっ蓮れんといふ身みはあまれしるをいふべし。日にっ蓮れん
を奉ほう行ぎやうすべし。此こ事じを奉ほう行ぎやうすべし。聖せい人にんの
たままにまはりしるをいふべし。申まう用ようなり。世よを
まはりしるをいふべし。國くにをまはりしるをいふべし。思おもはるをいふべし。
の法ほふ師しをまはりしるをいふべし。日にっ蓮れんといふ身みはあまれしるをいふべし。
日にっ蓮れんといふ身みはあまれしるをいふべし。佛ぶつのあらはつて日にっ蓮れんといふ身みはあまれしるをいふべし。
日にっ蓮れんといふ身みはあまれしるをいふべし。

さらにいふべし。梵ぼん天てん帝だい釋しやく日にっ月げつ四し天てんの
佛ぶつといふ身みはあまれしるをいふべし。遠えん流りゆう死し罪ざいの後のち百ひゃく日にっ一いち年ねんの内うち。
自じ言げん及及び逆ぎやくの事ことをいふべし。此こ一いち門もんの事ことをいふべし。四し方ほうをまはりしるをいふべし。ま
あらはしし。其その後のちたとくしるをいふべし。其その時とき必かならず後のち海うみあ
まらるべし。西せい方ほうをまはりしるをいふべし。其その時とき必かならず後のち海うみあ
まらるべし。賴らい細さい以もつ下くだる者ものをいふべし。座ざをまはりしるをいふべし。聖せい人にんの
道みち阿あ弥みの惡あくは立たつて。天てん隆りゆう房ぼう邪じゃ見けんの聖せい一いち坊ぼう嫉しやく妬た
の道みち阿あ弥みの惡あくは立たつて。天てん隆りゆう房ぼう邪じゃ見けんの聖せい一いち坊ぼう嫉しやく妬た
て。非ひはまらるべし。又また十じゅう宗しゅうの惡あくは立たつて。天てん隆りゆう房ぼう邪じゃ見けんの聖せい一いち坊ぼう嫉しやく妬た
所ところに日にっ蓮れん及及び子しのあらはつて日にっ蓮れんといふ身みはあまれしるをいふべし。

土長貫卷三



りの功徳を父母より承りて
 子に伝ふるはまふくし
 のちをうやく龍の口は海邊
 かあしてひびくもた
 もかまひる。日蓮のまほしき
 頼基の聖人古最期よちり
 むちりし神のこゝのた
 ちよみまふくし

神の國の時も遠きまを
 のまひる。正直の
 志しる。日蓮の正法の
 行者あり。天神地祇
 霊山のををぬく
 なる。満月の
 鷹の
 鷹隼の
 雲霞の
 月

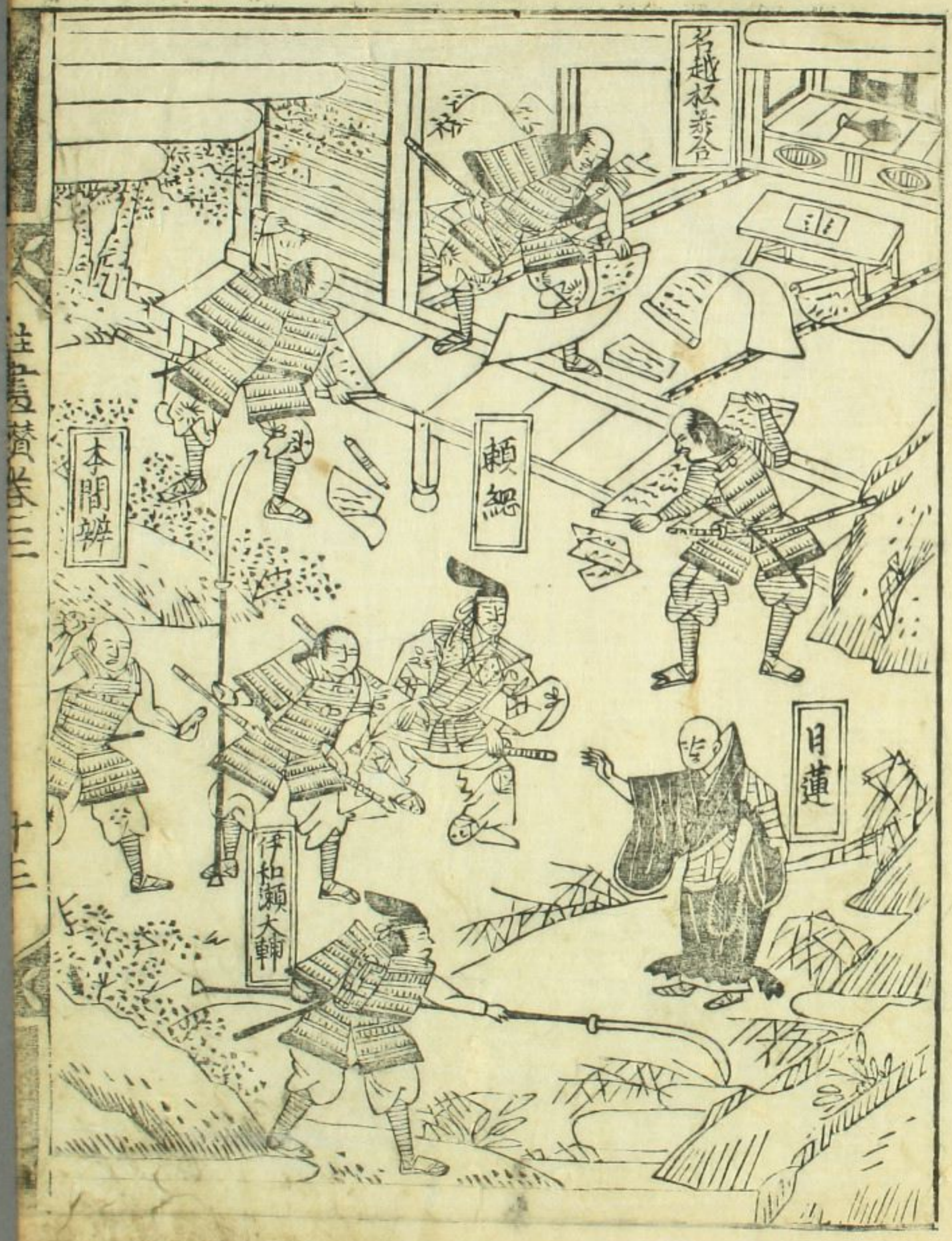
正徳元年八月

一

天子の御座りたまふものなりあるひは八幡大菩薩の御座りたまふものなりあるひは重連の御座りたまふものなり越智三郎元衛門尉直重の御座りたまふものなり神もひまの御座りたまふものなり警固の武士の御座りたまふものなり地もひまの御座りたまふものなり馬もひまの御座りたまふものなり又もひまの御座りたまふものなり大星の御座りたまふものなり大地の御座りたまふものなり虚空の御座りたまふものなり法華經の行者の御座りたまふものなり子孫の御座りたまふものなり国土の御座りたまふものなり

さて相模守大なる御座りたまふものなり日蓮法師の御座りたまふものなり龍の御座りたまふものなり金洗澤の濱の御座りたまふものなり聖人の御座りたまふものなり諸天地神の御座りたまふものなり日蓮をすくむものなり国主の御座りたまふものなり法華經の行者の御座りたまふものなり地神の御座りたまふものなり諸天の御座りたまふものなり龍神の御座りたまふものなり法華經の御座りたまふものなり杖不加の御座りたまふものなり

ともたのむのしるすはあまのりるり。後生
 にもうらむし。不輕菩薩の杖木瓦石の
 るし。覺徳比立の杖入るし
 薩の毒説す。大事の妙法をひろめし
 方よし又ひろむ。佛意うらむし
 のひ。天神地祇も守護とくへ。法華經と天
 下はひろめし。末世のまごやうが。佛果と
 うへまのしるす



法華經卷第三

十三

